

# 金岡西遺跡

2001.3

大阪府教育委員会



## はしがき

大阪平野の南部、和泉山脈の前面に広がる丘陵地帯と河内平野の沖積低地との間には、台地が形成されています。東は石川水系に限られ、西の大坂湾に面する地域は、都市化が進んだ一部を除いて豊かな田園風景を残してきました。現在でも同じ大阪平野のなかにあって他と比べてその位置は変わらないのですが、近年徐々に変化が生じてきました。大規模道路の建設などに伴なって開発が進行しているとみられます。この地域の歴史をたどってみると、大変興味深いことがわかります。古代の道路、竹ノ内街道（丹比道）、長尾街道（人津道）などの道路網の存在です。谷筋・尾根筋などが主要な道であった段階から経済的、政治的必要性からその人的、物的移動の環境整備へと関心が向けられてきました。今回調査しました金岡西遺跡は、まさしく竹ノ内街道に近接した所にあります。発掘の結果、奈良時代から鎌倉時代にわたる建物や構造や多くの穴、溝、畦などが見つかりました。特に、建物のひとつは奈良時代に建てられたものとみられます。このように、古代から中世に及ぶ建物や水路や畔からは、当時の集落や耕地の具体的な様子を垣間見せてくれる成果となりました。今後の調査にも期待が寄せられます。

調査に際しましては、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたします。引き続き、皆様のご理解とご協力をお願いします。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

## 例　　言

- 本書は、都市計画道路南花田鳳西町線建設工事に先立って、大阪府教育委員会が実施した堺市金岡町地内所在金岡西遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査は、大阪府土木部交通政策室・鳳土木事務所の依頼を受け、文化財保護課主任技師今村道雄・同亀島重則を担当者として実施した。
- 現地調査は、平成11年度・12年度事業として、平成12年1月から5月までと9月から平成13年2月までの期間、実施した。なお、出土資料の整理作業は、現地作業と並行して始め、平成13年3月まで行った。
- 本調査の写真測量は、株式会社アコードに委託した。なお、撮影フィルムについては株式会社アコードにおいて保管している。
- 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
- 本書の執筆は、今村道雄・亀島重則・竹原伸次が行い、編集は亀島が行った。
- 発掘調査・遺物整理および本書作成に要した経費は、全額大阪府土木部が負担した。

## 目　　次

### はしがき・例言

第1章　調査にいたる経過..... 1

### 第2章　調査の成果

　　第1節　調査の方法..... 1

　　第2節　遺跡の土層構成..... 5

　　第3節　試掘調査の成果..... 6

　　第4節　平成11年度の調査..... 11

　　第5節　平成12年度の調査..... 23

第3章　まとめ..... 38

### 抄録

## 第1章 調査にいたる経過

金岡西遺跡は近畿地方の中央部に位置する大阪平野に立地する。大阪平野は、北は北摂山地、東は生駒山地、南は和泉山地に囲まれている。その前面には、千里丘陵、枚方丘陵、羽曳野丘陵、泉北丘陵などの丘陵が発達し、さらにその前面に洪積段丘が形成されている。この段丘は、高位から低位まで区別され、それぞれその形成事情や時期を物語っている。また、これらの丘陵、段丘を剖析して流下する河川は各地域に細かな微地形を造形しつつ低地へと流れ、海岸へと到達する。金岡西遺跡の位置する堺市金岡町一帯は、洪積段丘中位面上にある。この段丘面は東は松原市、美原町、藤井寺市へと広がる。この広大な範囲を占めている段丘上へいつ頃から、どのような契機で、どのような人々によって開発が行われてきたかは大変興味深いことである。従来はさほど実態のわからなかったこの地域について、近年の大規模工事をはじめとする諸工事に伴って発掘調査が実施され、新たな知見が増加しつつある。今回の調査もそのひとつに加わることになる（第1図）。

さて、今回の調査は都市計画道路南花田鳳西町線の建設工事に伴って事前に発掘調査を行ったものである。この都市計画道路の建設工事に関しては、すでにその路線区间で遺跡が発見され、調査されている。1985年から1989年にかけて今回の調査地の北に位置する南花田遺跡で調査が実施された。その結果、竪穴状遺構をはじめとする旧石器時代の遺構、石器や古墳時代後期の集落、奈良時代の井戸、中世の屋敷地などが発見されている（大阪府教育委員会1986～1990）。今回の予定地周辺では、西に隣接する金岡の集落の地下で平安時代～鎌倉時代の集落の存在が推定され（金岡神社遺跡）、さらに南東には、奈良時代末から平安時代の掘立柱建物などが検出された金岡遺跡が存在することから、新たに遺跡の発見される可能性が高いと考えられていた。

のことから、その延伸区间である本調査区についても事前に埋蔵文化財の有無について試掘調査の必要性がこの道路計画の事業者である大阪府土木部との間で確認され、実施された。その結果、遺構・遺物が出土し、新規発見の遺跡として工事に着手する前に発掘調査が必要であることとなった。

今回の調査は2000年1月から5月まで（第1次調査）、2000年9月から2001年2月まで（第2次調査）実施した。調査区はその時点での用地買収の終了した部分を対象とした。道路予定幅20mに対して、用地を横断する里道で調査区が寸断されている。そのため、第1次調査でA・Bの2地区、第2次調査でA・Bの2地区に区分して調査を進めた。

## 第2章 調査の成果

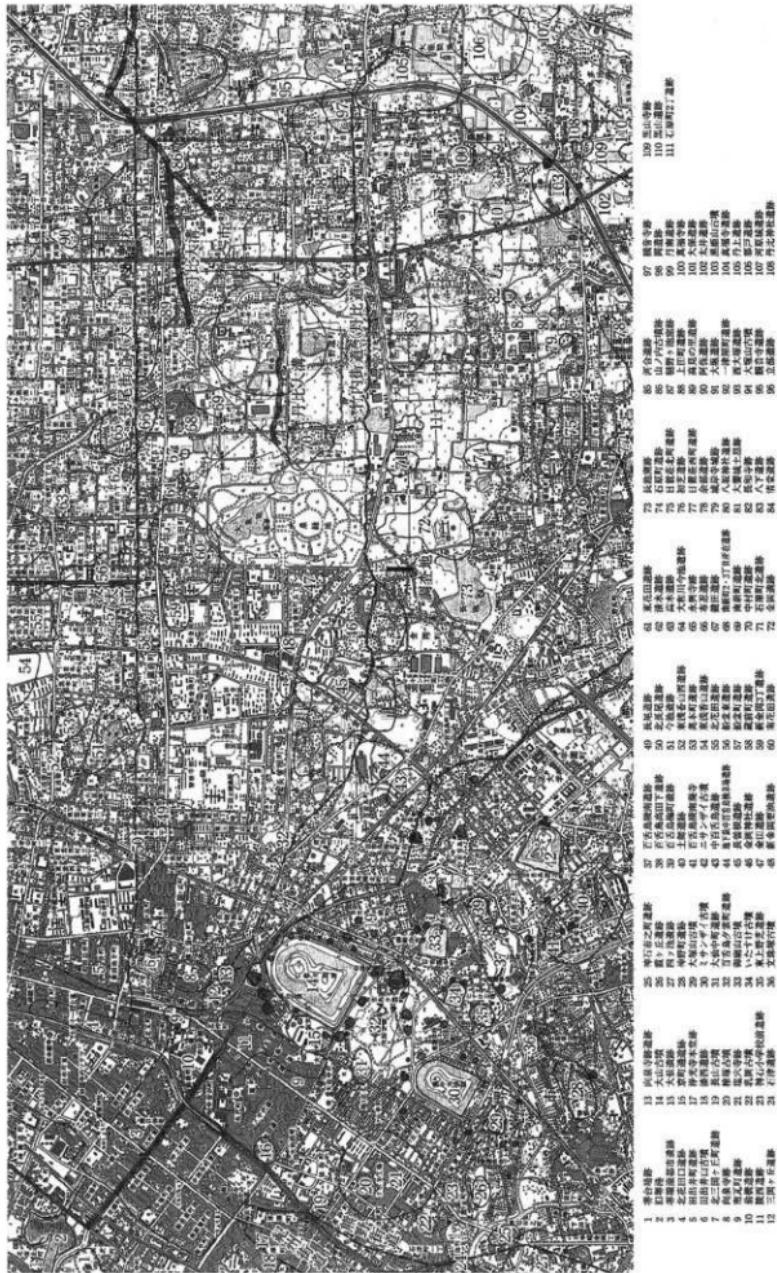
### 第1節 調査の方法（第3図）

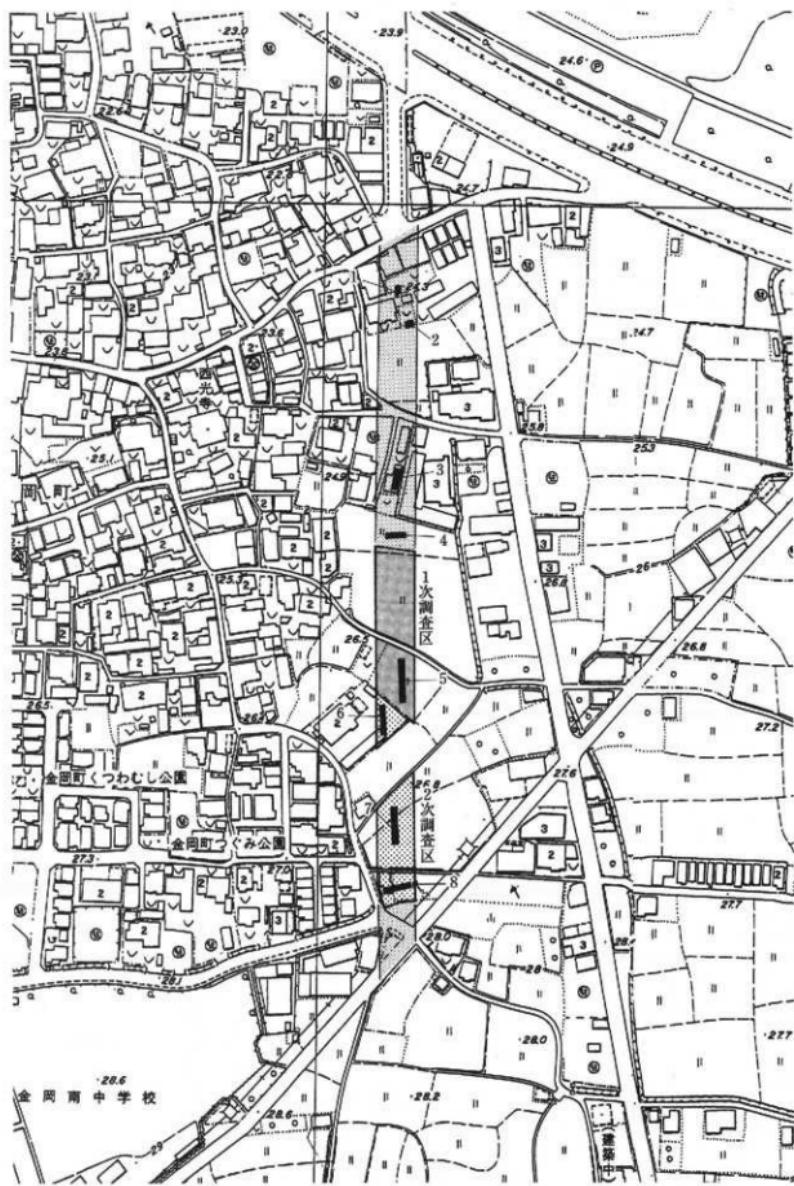
今回の調査は、道路予定地の2875m<sup>2</sup>を対象とした。掘削方法は、地表下盛土層・旧耕作土・



第1図 大阪平野南部の地形分類図

第2図 周辺道路分布図 (1/40,000)





第3図 調査位置図 (1/2,500) 1~8は試掘トレンチ

床土の各層について、機械により掘削を行い、以下の層については、人力掘削により調査を行った。遺構・遺物の検出位置を記録するために、国土座標に基づいて作成した「大阪府遺跡地区割表示」にならって表示し、報文を記述した。各調査区での発掘作業の最終段階において、遺構の全体的な平面測量には、ヘリコプターによる写真測量（1/20）を実施した。また、調査区の断面や各遺構の詳細図や遺物の検出状況などについては、調査の進行に合わせて随時実測を行った。報文中では、遺構番号を一部整理番号で示した他は、現場での野外番号をそのまま使用した。また、標高はTPを基準とした値である。方位については国土座標での表現を基準とした。土層の色調記載には、「新版標準上色帖」（小山正忠・竹原秀雄編1987）を用いた。

## 第2節 遺跡の土層構成（第4図）

今回の調査地は、洪積段丘段丘中位面上に立地している。この段丘面は南から北に向かって傾斜している。今回の調査地の北端にあたる1次調査のA区北の地表面で、標高25.8m、南約170mの2次調査B区南で、27.8mと比高差約2.0mで約1/100強の傾斜をもつ。この点から、全体に南北方向に土層堆積の量重がみられると予想された。調査の結果、表層の盛土層以下、大別して8層に区分される土層を確認した。人為的な遺構を被覆し、遺物を包含する土層は、基盤層の凹地部分を除いて、約5~10cmと薄く、しかも調査地点によって、その欠落するところがある。調査地の北にあたる1次A区では存在せず、耕作土下の床土下面で遺構が検出されている。これは段丘地形での遺跡の遺存状況に共通するもので、沖積地などの低地と違って、一般的に基盤層の形成後は、一般的に土砂の堆積が少ないからである。本調査地でもその例にもれない。時代を経るごとに人為的なあるいは自然による削平と堆積が行われるが、削平の要素の方が大きいからである。次に各土層ごとにその特徴を記し、定義づけておこう。

盛土層——1次B区、2次A・B区で盛土が見られる。層厚50cm~1m。

第1層——褐灰色（10YR 5/1~7.5YR 5/1）粘質微砂質土 旧耕作土 層厚20~25cm。（第4図 1）

第2層——黄灰色（2.5Y 6/1~5 Y 6/1）微砂質土 層中に鉄班やマンガン班を含み、褐色を帯びる。下位の第3層のブロックを含む。耕作土の床土層。層厚5~10cm。本層下面で2次B区北端から北では、古代から中世の遺構が検出された。2次B区では北部を除いて存在しない。（2）

第3a層——橙色（7.5YR 6/7）粘質土 2次A区に見られる土層。層厚6~7~10cm。一部で床土層を形成。1次B区の落ち込み200埋没後の凹地や2次B区北端の溝1埋没後の凹地に堆積する土層も同一の層。（3a）

第3b層——明黄褐色（10YR 6/6）粘質土~微砂質粘質土 微砂をまじえる。2次B区中央部に見られる。層厚約5cm。溝3埋没土とほぼ同じ土。平安時代末頃。（3b）

第4層——明黄褐色（10YR 6/6）粘質土 1次B区・2次A区では灰黄色~黄灰色を

呈する。1次B区の落ち込み200付近の第3a層の下・2次A区北部・B区中央部北寄りに見られる。層厚6・7cm(4)

第5a層——黃灰色(2.5Y 6/1)微砂質粘土 鉄斑を含み、にぶい黄色を帯びる。2次B区中央部溝群付近に存在する。層厚約5cm。(5'')

第5b層——褐灰色(10Y R 5.5/1)微砂質粘土 第5a層の下位にある。溝5・10の埋没後に堆積する。溝埋土起源の土が含まれる。鉄斑・マンガン斑を含む。層厚約10cm。(5'')の最上部層

第6層——明褐色(7.5Y R 5/6)粘土 1次B区にみられる土層。落ち込み200の掘削を受ける。奈良時代包含層。層厚約10cm。(6)

第7a層——にぶい黄橙色粘土～砂礫(1次A・B区)、灰色(7.5Y 6/1～6.5/2～7/1)微砂混じり砂質土(2次A区)、灰白色(7.5Y 7/1.5)微砂質粘土(2次B区)  
無遺物層で、段丘堆積物である。層厚15～50cm以上。(8)

第7b層——にぶい黄橙色砂礫(1次A・B区)、黃灰色(2.5Y 6.5/1)砂礫他(2次A区)、  
灰白色(5Y 7/1)粘土～砂礫(2次B区) 上位層と同じく、無遺物層で、段  
丘堆積層である。上位の第7a層との境界線は調査地南端で標高約26.0m、北端  
で25.1m、比高差約1mを測る。この境界線の起伏は砂礫の流出堆積によってで  
きた下刻痕に粘土や砂礫が埋積していった状況を示し、段丘形成末期の様相を示  
す。現況地条にみられる谷筋と同様、南東から北西に向かって幾条も走っている  
と考えられる。

(亀島重則)

### 第3節 試掘調査の成果(第5・6図)

調査場所 堺市金岡町地内 都市計画道路 南花田鳳西線建設予定地

調査日時 平成10年12月

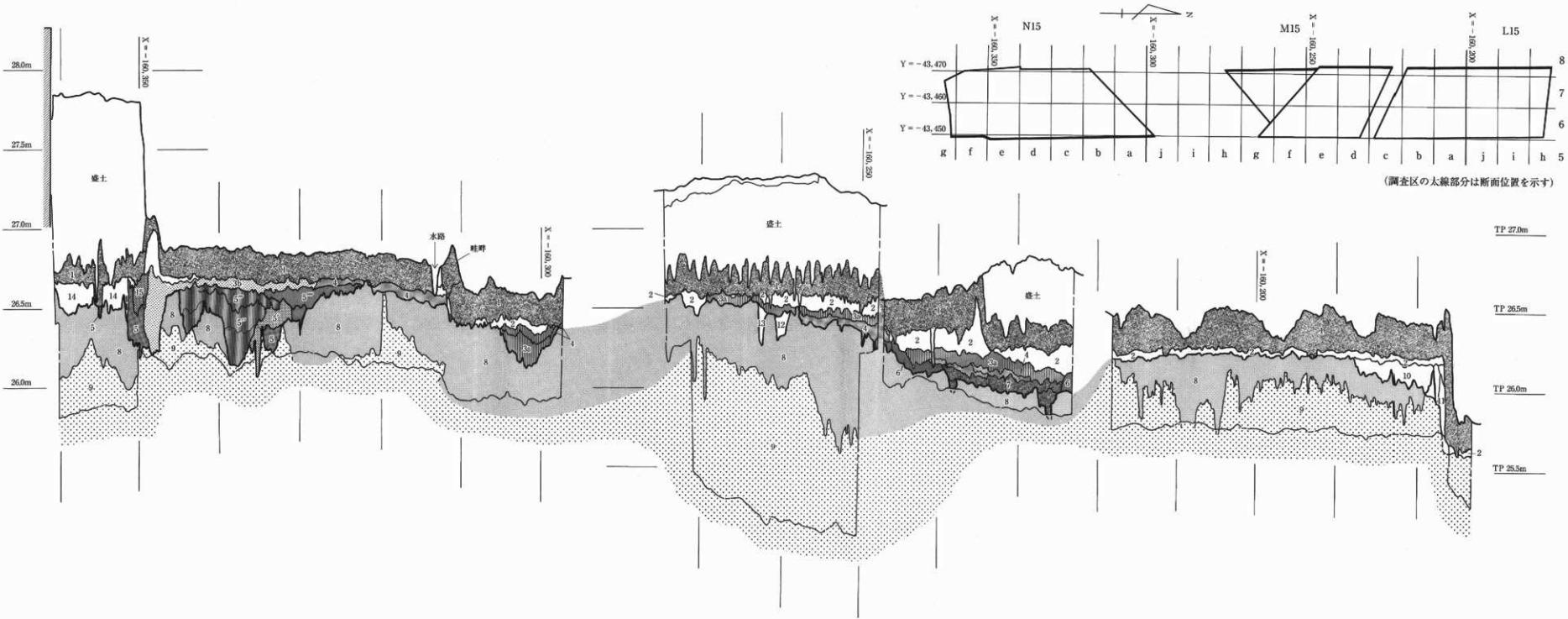
調査方法 事業計画地内に8ヶ所の試掘坑(178m<sup>2</sup>)を設定し、機械および人力により掘削を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

道路予定地内で調査可能な地点に、8ヶ所の試掘トレンチを設定し、調査を実施した。

#### No.1、No.2調査区

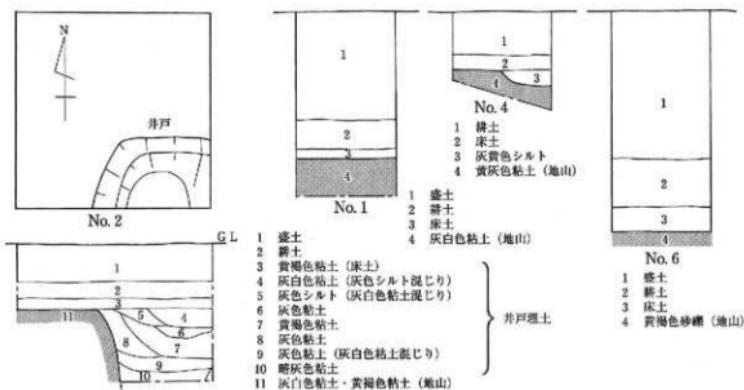
調査地の北部、竹内街道から約20m南に下がったところに2m×2mの調査区を設定した。層位は、第1層 盛土、第2層 耕作土、第3層 床土、第4層 灰白色粘土(地山)である。

No.1調査区からは遺構・遺物は確認できなかったが、No.2調査区地山上面から井戸一基を検出した。井戸は調査区の南東端から検出したため、その全体の大きさは確認できなかった。検出面から約70cm掘削したが、底は確認できなかった。



- 1 暗灰色 (10YR5/1) 粘質微砂質土 旧耕土。  
 2 黄褐色 (25Y6/1) 粘質微砂質土 鉄鉻・マンガン斑を含む。下位の3層のブロックを含む。耕土の土層。  
 3a 黄 (25Y6/2) 粘質土 上部は黄灰色。  
 3b 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土-砂質粘質土層 砂質泥じり。  
 4 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質土-1次Bk区-2次A区では灰褐色-青灰色を呈する。  
 5 灰褐色 (7.5Y6/2) 粘質微砂質土 黄灰色-灰白色微砂質じり。下部には褐灰色砂 (VCS-MS以下) が混じる。拂10埋土。  
 5' 灰褐色 (10YR6/15) 粘質微砂質土と灰黃褐色 (5Y8/1) 微砂の混じった土-青灰色 (25Y6/1) 微砂質土-砂質土 鉄鉻・マンガン斑を含む。  
 5'' 灰褐色 (25Y6/2) 粘質微砂質土 填埋土-微砂質粘質土 填埋土 上位には褐灰色-灰黃褐色 (10YR6/15-SY8/1) 微砂が混じる。  
 5''' 灰褐色 (25Y6/15) 粘質微砂質土 填埋土-粉土の土の土が含まれる。鉄鉻・マンガン斑を含む。  
 6 黄灰色 (25Y6/1) 粘砂質土 鉄鉻・マンガン斑を含む。  
 7 黄褐色 (10YR6/2) 砂混じり粘質土 茎立ち込み200mm上。  
 8 にふい黄色色粘土-砂混じり粘質土 (1次A区)。灰色 (7.5Y6/1-6.5/2-7/1) 微砂混じり砂質土 (2次A区)、灰白色 (7.5Y7/1) 粘土-砂混じり粘質土 (2次B区)。  
 9 黄褐色 (10YR6/6) 砂質土上。  
 10 黄褐色 (25Y5/1) 砂混じり粘質土。  
 11 黄褐色 (25Y5/1) 土-にふい黄色色 (10YR5/4) 土。  
 12 灰色 (7.5Y5/1) 砂混じり粘質土。

第4図 調査区全体土層断面図 ( $H = 1/400 \cdot V = 1/20$ )



第5図 遺構図1 (試掘調査) (1/50)

井戸中からは、瓦器、土師器羽釜、瓦片が検出したが、埋土の状況から近世以降に埋められたものと考えられる

#### No.3 調査区

調査区のはば中央部に2m×10mの調査区を設定した。層位は、第1層 盛土、第2層 耕作土、第3層 床土、第4層 黄灰色シルト(疊まじり)(地山)である。

地山上面から、土色の変色した部分を確認したが、掘り方が明確でなく染みこみと思われる。遺物は出土しなかった。また、第2層、第3層からも遺物は出土しなかった。

#### No.4 調査区

No.3 調査区の南側に2m×5mの調査区を設定した。層位は、第1層 耕作土、第2層 床土、第3層 黄褐色シルト(床土2)、第4層 黄灰色粘土(地山)である。第3層は調査区東側のみに堆積している。第2層からは須恵器、土師器、瓦器片が、第3層から瓦器片が出土した。

遺構は検出できなかった。

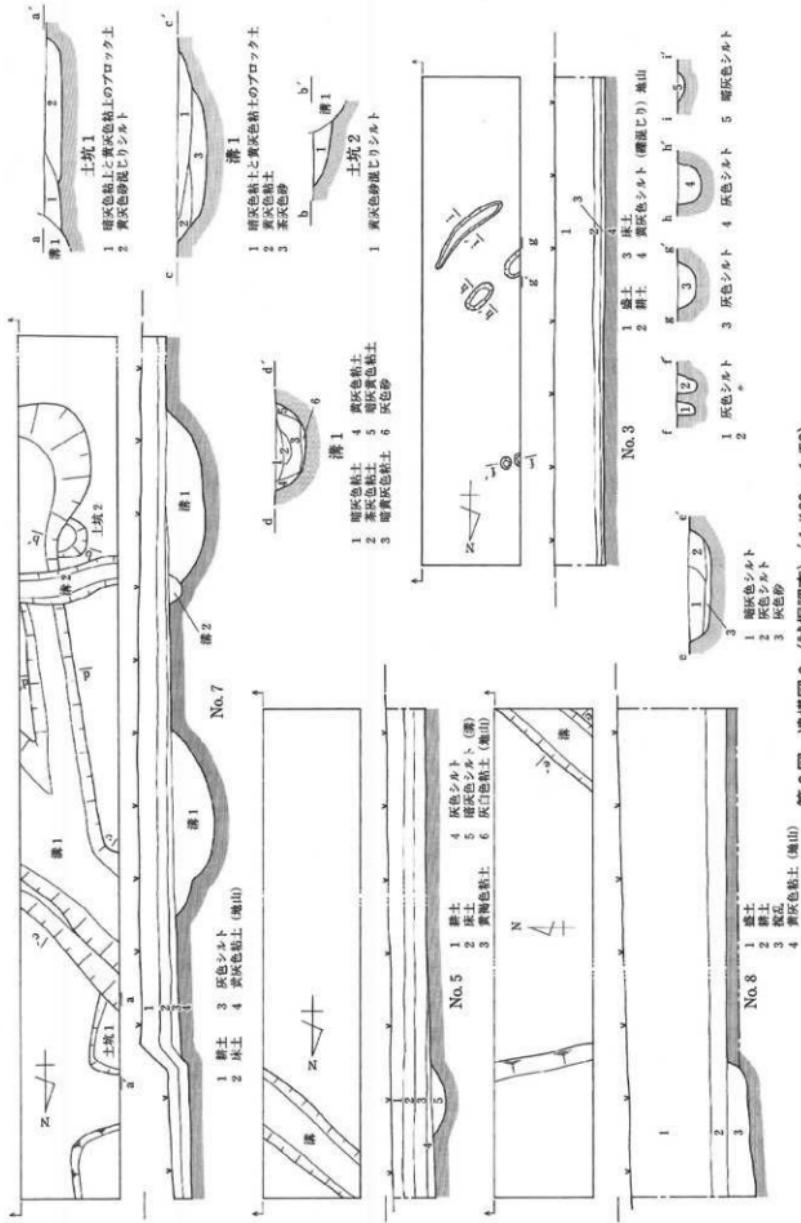
#### No.5 調査区

調査地の南部2m×20mの調査区を設定した。層位は、第1層 耕作土、第2層 床土、第3層 黄褐色粘土、第4層 黑色シルト、第5層 暗灰色シルト(溝埋土)、第6層 黄白色粘土(地山)である。第1層から第4層から奈良時代から鎌倉時代の須恵器、土師器、瓦、瓦器片が多量に出土した。特に第3層、第4層は古代から中世の遺物包含層である。

遺構は、調査区北端より北西から南東の方向を溝を1条、地山上面から検出した。幅約1.2m、深さ約15cmを測る。溝中から須恵器片が出土した。

#### No.6 調査区

No.5 調査区の南側に2m×15mの調査区を設定した。層位は、第1層 盛土、第2層 耕作



土、第3層 床上、第4層 黄灰色砂礫（地山）である。

遺構・遺物は確認できなかった。

#### No.7 調査区

調査区の南端に2m×20mの調査区を設定した。層位は、第1層 耕作土、第2層 床土、第3層 灰色シルト、第4層 黄灰色粘土（地山）である。第2層から第3層は奈良時代から鎌倉時代の須恵器、土師器、瓦器片が出土した。第3層はNo.5調査区第4層と同じであり、遺物包含層である。

遺構は、溝2条、土坑2基を検出した。溝1は北西から南東方向の溝で、途中で2条に分岐する。幅約1から2m、深さ約30から40cmを測る。溝2は、東西方向の溝で溝1より新しい。幅約70cm、深さ約20cmを測る。溝2からは遺物は出土しなかったが、溝1から須恵器、土師器、瓦器片が出土した。時期的には鎌倉時代後期と思われる。

土坑1、2は共に溝1よりも古いが遺物が出土しなかったため時期は不明である。

#### No.8 調査区

No.7調査区の南側に2m×15mの調査区を設定した。層位は、第1層 盛土、第2層 耕作土、第3層 撥乱、第4層 黄灰色粘土（地山）である。

遺構は、調査区東端より北東から南西方向の溝を1条、地山上面から検出した。幅約1m、深さ約20cmを測る。溝中から須恵器片が出土した。

### 3.まとめ

今回の試掘の結果、道路予定地の南側は遺物包含層及び遺構が残存しており、当該地は、古代から中世にかけての当時の集落の一画に当たると考えられる。

### 4. 調査後の措置

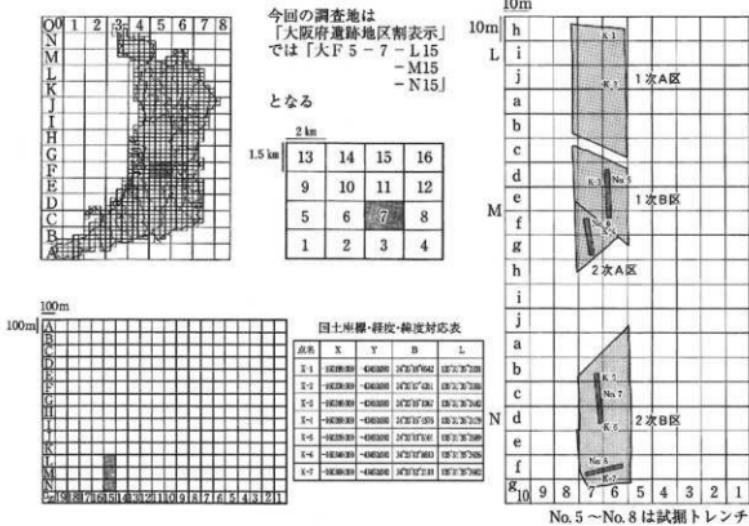
遺構・遺物が発見されたため、事業者に対し文化財保護法にもとづく遺跡の発見通知を提出するように指示した。また、事業の実施に際しては事前に発掘調査の必要があり、本府教育委員会と協議するよう回答した。

(竹原伸次)

## 第4節 平成11年度の調査（第1次調査）

### A区（第8～13図）

A区は幅約20m、長さ約53mの南北に長い調査区である。調査区の標高はTP25.6から25.7mである。調査した遺構は掘立柱建物2棟、横列1ヵ所の他に方形土壙やピット等である。遺構は、建物と横列が奈良時代、土壙が中世、その他の遺構は奈良時代か中世のいずれかの時期のものが多いと考えられるが、包含層出土遺物には飛鳥時代の土器も認められ、その時期の遺構をふくんでいる可能性はあるものの当該期の遺構を抽出することは困難であった。



第7図 調査区位置図

次に、主な時代の遺構と遺物を説明する。

#### 奈良時代の遺構

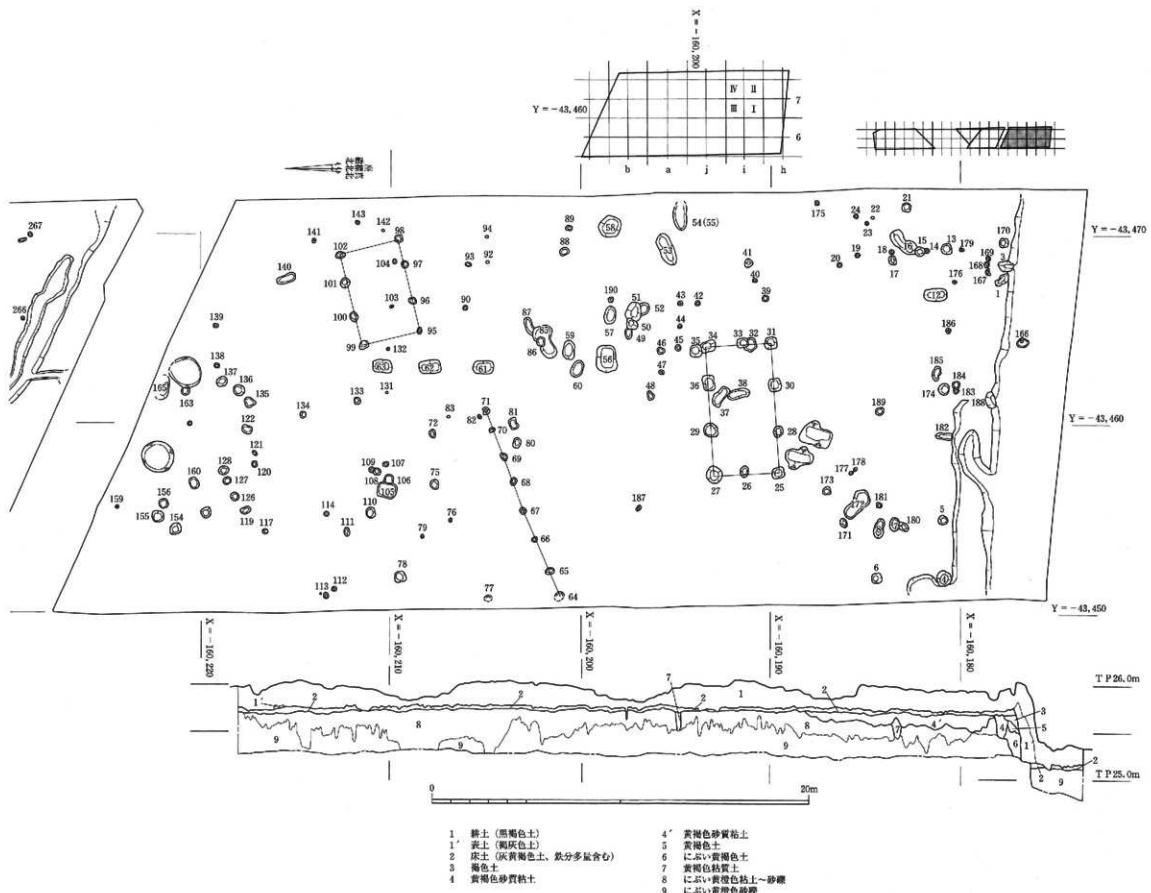
建物1 本遺構は、桁行3間、梁行き2間、桁行の軸はN-86°20'-Eの方向である。この遺構の南や約16mには建物2、南東11mには櫛列1がある。桁行は約6.9mで、各柱間は、両端が約2.2mに対し中央が約2.5mになりひろい。梁行きは約3.45mで、各柱間は約1.45mと約2.0mを測る。各掘り形の埋土には柱根や柱の痕跡は残されていなかった。柱を抜き取ったのであろう。建物のビットは4隅のものが深く30~40cm余、他のビットは10~20cmである。ビットの埋土は、黄褐色土、にぶい黄褐色土、にぶい黄色や黄橙色土が充填している。

遺物は、何れのビットからもしていない。

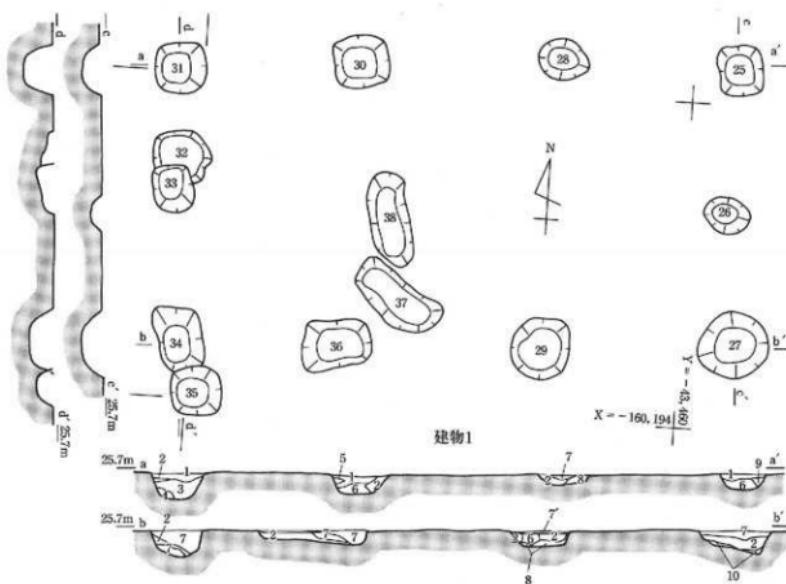
建物の時期は、A、B区出土遺物から奈良時代後半頃かと考えられる。

建物2 建物1の南約16m、櫛列1の南西約5mにある。桁行3間、梁行き1間、桁行の軸はN-77°-Eの方向である。桁行は約4.9mで、各柱間は両端が約1.3m、1.5m、1.6mに対し、中央は約2.0mを測りやや広い。梁行きは約3.2mを測る。各掘り形の埋土には柱根や柱の痕跡は残されていなかった。柱を抜き取ったのであろう。建物のビットは4隅のものがやや深く30cm余、他のビットは深さ10~20cmである。ビット埋土は、黄褐色土、にぶい黄色粘質土、灰黄褐色土等である。

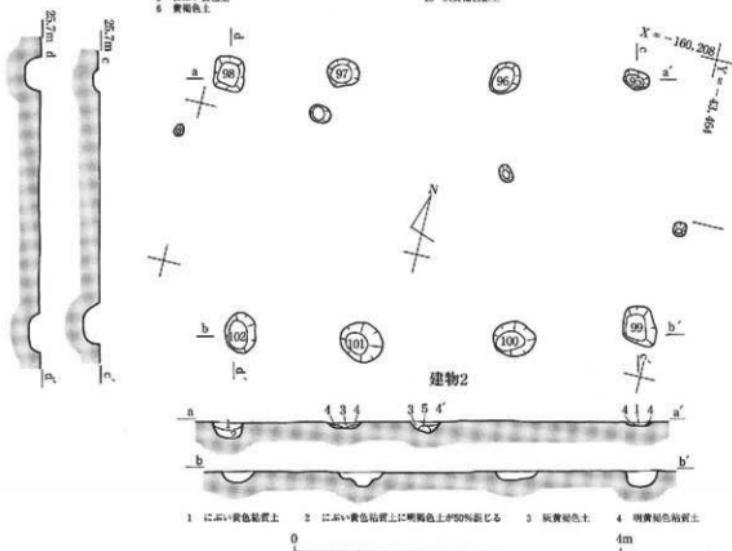
遺物は、何れのビットからも出土していない。



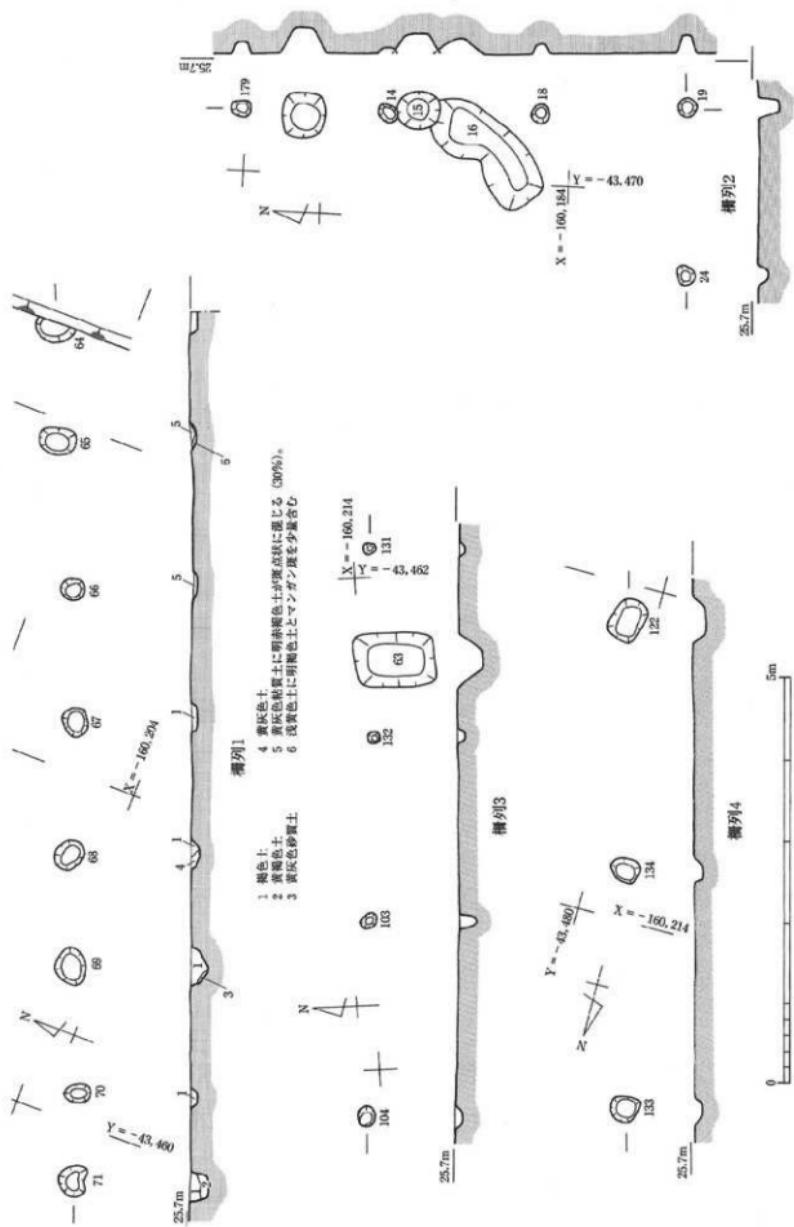
第8図 遺構全体図 1次A区 (1/200)



- 1 黄褐色土 マンガン混含む
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土に近い褐色土がブロック状に混じる
- 4 黄褐色土
- 5 に近い褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 深黄褐色土 マンガン微量含む
- 8 前面に土
- 9 黄褐色土
- 10 深黄褐色土



第9図 掘立柱建物 (1/10)



第10図 棚列(1/60)

建物の時期は、A、B区出土遺物から奈良時代後半頃と考えられる。

**柵列1** 建物2の北東約5mにある。調査区から検出した長さは9.4m、ピットは8ヵ所だが調査区外へ延びる可能性もある。柵列は西端から約5.6mの5ヵ所目のピットで3°の角度で屈曲する。ピット間隔は広狭の差異があり一定していない。ピットの西端からの間隔は1.1m、1.6m、1.3m、1.7m、1.6m、1.9m、1.4mになる。ピットのプランは不整形で、小さいもので70の径22cm、大きいもので69の45cmだが、30cm余のものが多い。深さは浅いもので66の6cm、深いもので69の22cmを測る。埋土は、黄褐色土、黄灰色土等である。

遺物は、ピット69から土師器片2点、70から須恵器片1点が出土しているが細片である。このため柵列の時期は判然とし難いが奈良時代ごろと考えられる。

#### 中世の遺構

##### 土壤群（56～63）

A区中央西側にあるこの群は南北13m、東西8mの範囲から8基の土壤を検出した。土壤の配置状況からA群（56～60）、B群（61～63）の2群に区分できる。A群の中で58は他の土壤と若干距離を隔てており別の群の可能性もある。この他に12、52～54等の土壤が中世と考えられる。

A群 56～60の4基は約3mの範囲に集中して築かれている。

56は方形プランを呈し、(136×98×36)cmの規模である。埋土は灰色粘質土に地山の橙色粘質土がブロック状に含む。遺物は出土していない。57、59、60は楕円形プランを呈する。57は(93×58×19)cm、59は(94×56×25)cm、60は(91×59×10)cmをはかる。57、60の埋土は灰色粘質土、59の埋土は56と同じである。遺物は出土していない。

58はほぼ円形プランである。規模は(120×110×10)cmを測る。埋土は灰色粘質土である。土壤57の西約3mにある。

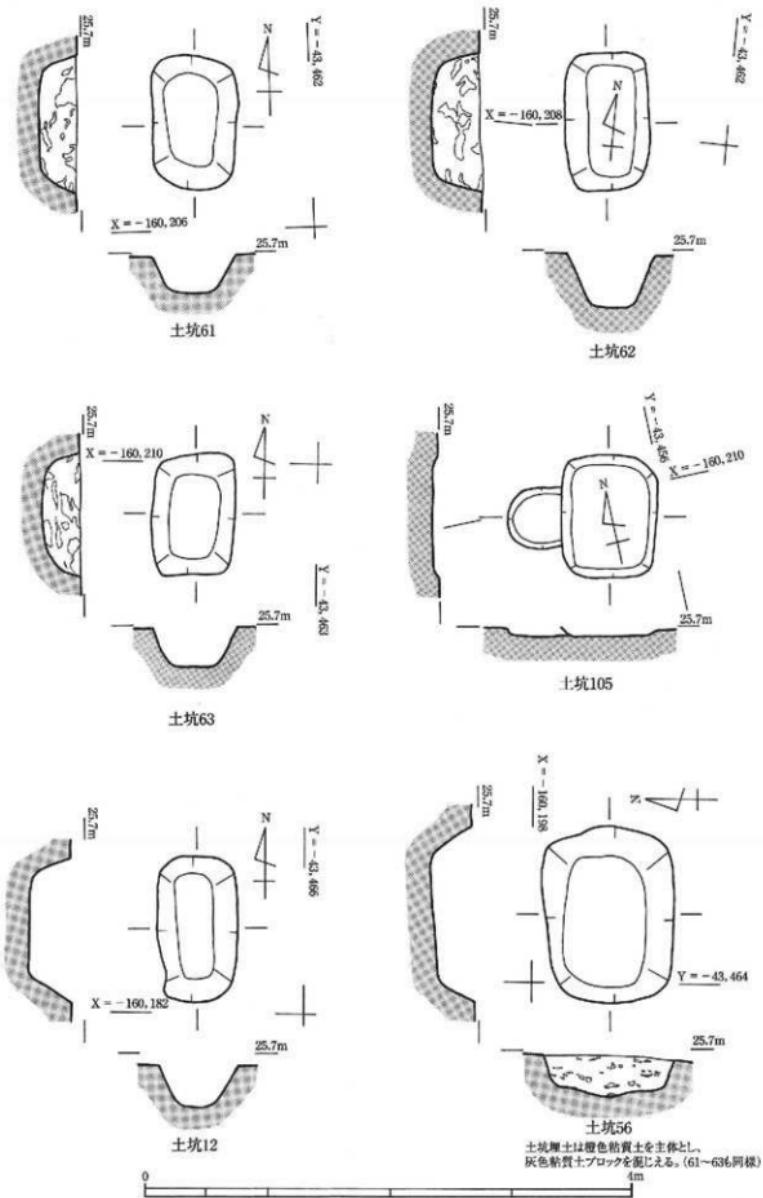
B群 土壤60の南約4～10m間に3基（61～63）が約1.3～1.6mの間隔で列状に並んでいる。プランは何れも方形である。

61は(94×59×31)cmで主軸が座標北、62は(110×69×41)cmで主軸はN-5°-W、63は(100×65×31)cmで主軸は座標北を指す。

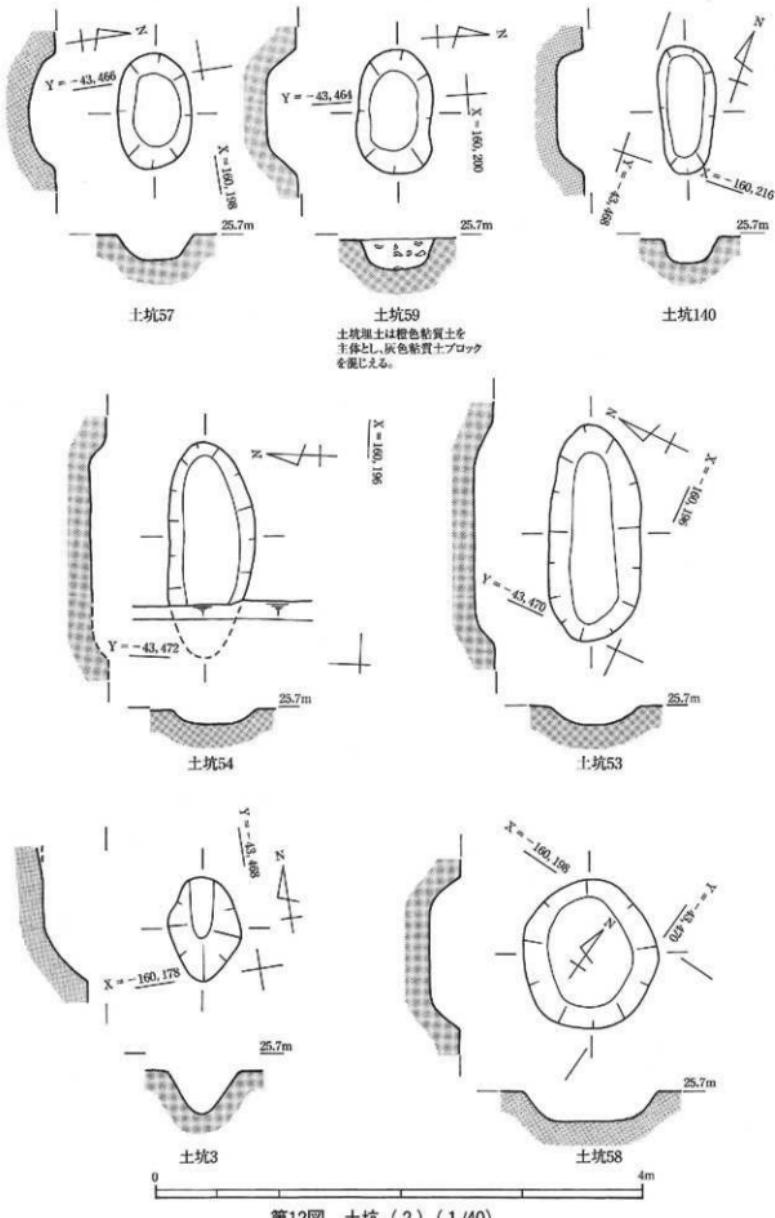
遺物は、61から須恵器片2点と土師器1点、62から須恵器片1点が出土しているが奈良時代頃の土器である。63から土器は出土していない。

#### その他の遺構

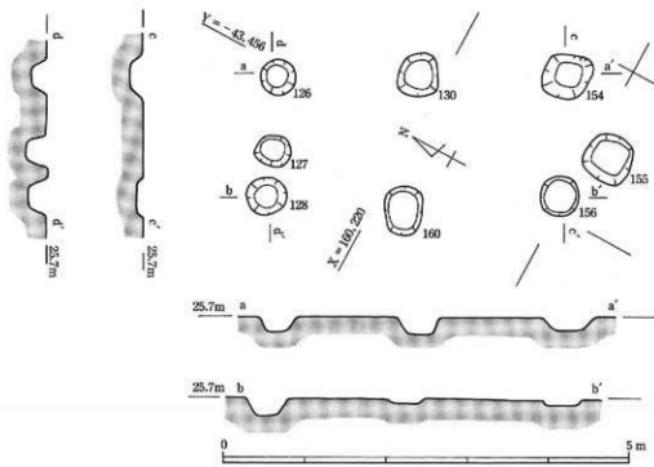
**ピット群** 建物2の東9m、柵列1の南4mのa、b6区と、建物2の南東12m、柵列1の南16mのb、c6区には若干ピットが集中し、建物などの遺構を予測させられたが遺構を確認するにはいたらなかった。このような個所は建物1の北東8m付近のk6区にも認められた。



第11図 土坑 (1) (1/40)



第12図 土坑(2)(1/40)



第13図 ピット群 (1/60)

土壤 12、52~54の土壤は、12が円、52~54が方形の土壤である。

12からは須恵器片2点、土師器片4点が出土している。52~54では土器は出土していない。

#### B区（第14図）

A区の南の幅3mの里道の南側にある南北35m、東西20mの菱形の調査区である。調査区の標高はTP + 25.3から25.5mを示し、A区より20から30cm低い。

調査で検出し、際立った遺構は少ない。その中で調査区中央で検出した落ち込み遺構とそこから割合多くの土器が出土したのが目立つ。

#### 落ち込み遺構 (200)

調査区中央を南東から北西方向に走る幅12m、長さ25m、深さ約30cmの浅い落ち込みがある。落ち込みは、座標北よりN-55°-Wの方向に伸びている。落ち込みの埋土は上層が灰色土や粘土層、下層が暗灰黄色土である。上層は磨滅した瓦器片を含むが下層は含まない。

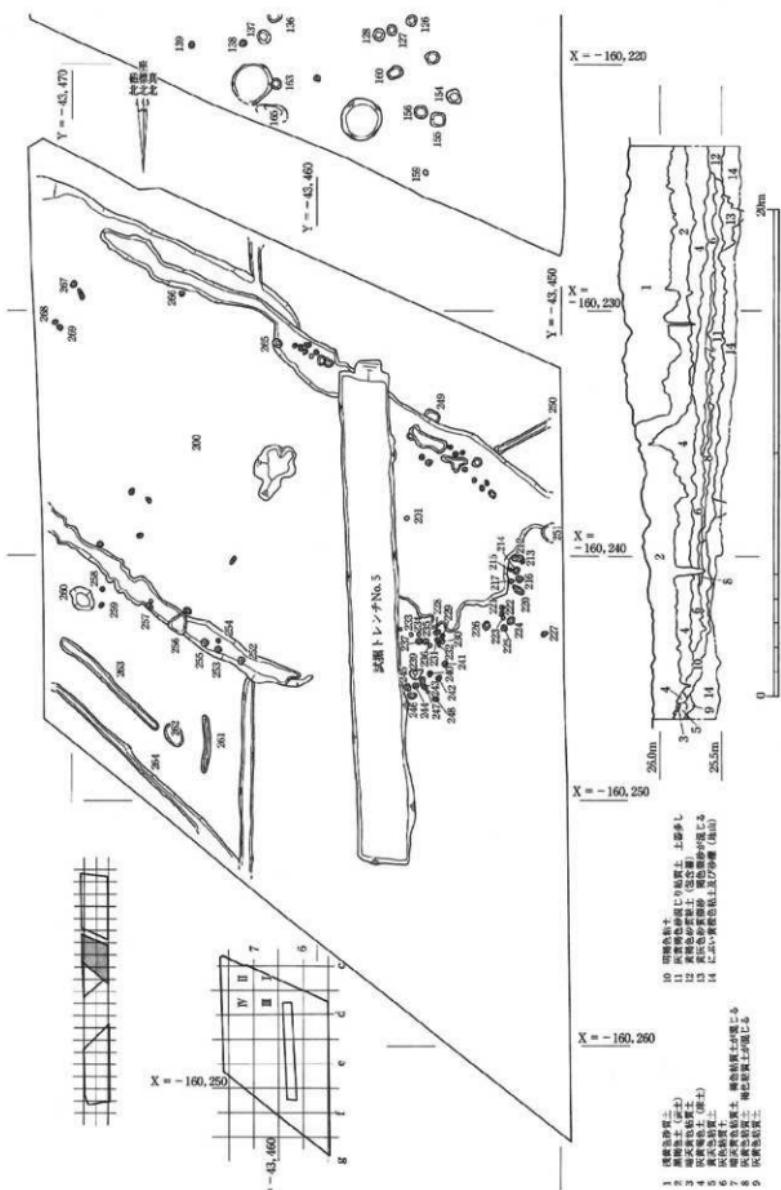
#### 出土遺物（第15図）

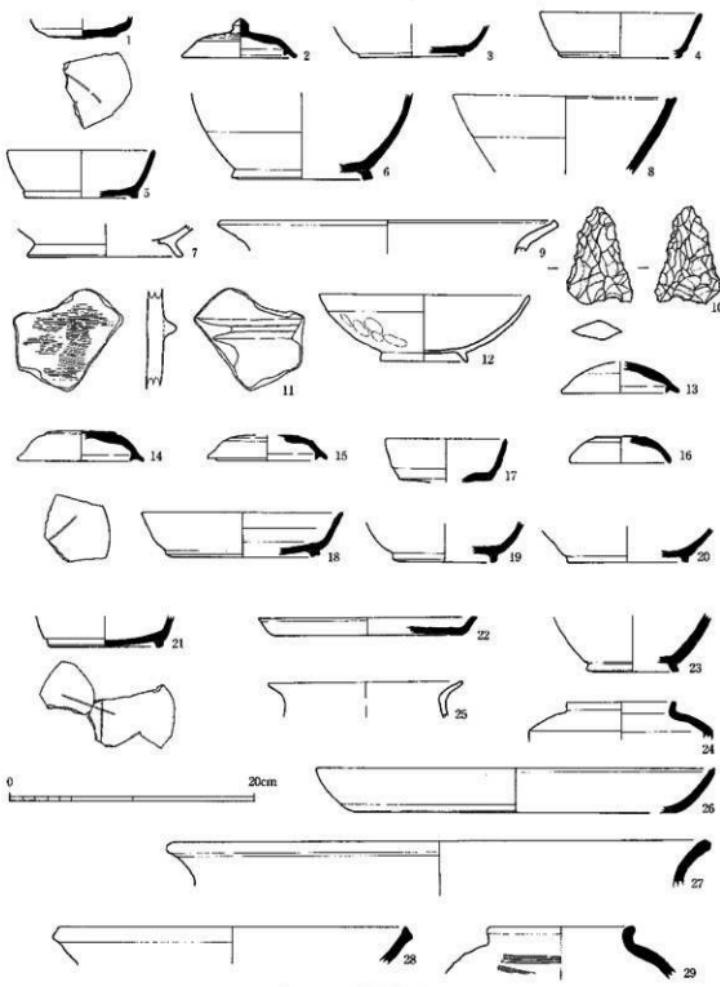
##### 遺構出土の遺物

1~10は遺構200の下層から出土した遺物である。1~7は須恵器、8・9は土師器、10は石鏡である。

1は須恵器杯身或いは杯蓋、2は口径9.4cmの杯蓋、3~5は杯身、6は壺、7は盤、8は壺、9は鉢ないしは碗であろう。10は石鏡である。遺物は、奈良時代の土器（3~8）が最多く、縄文時代の石鏡（1）、平安時代の土器（9）があるが混入品の可能性もある。

第14図 連続全体図 1次B区 (1/200)





第15図 遺物実測図1

#### 包含層層出土の遺物

A区の包含層からはある若干の遺物が出土しているが磨滅したものが多い。(11)は埴輪片である。戦後、中百舌鳥地区から土を搬入した際混入した可能性がある。(12)は瓦器碗である。出土遺物は破片ではあるが須恵器が多く、次に土師器片、瓦器片が多い。

B区の包含層からは(13~29)の遺物が出土している。13~24、27は須恵器である。13~16は口径8.2~10.2cmの杯蓋である。13、16の口径は8.2cmで10cmに満たない。17は、口径10cmの

杯身である。18～24は、杯、皿、壺、短頸壺等である。25、26は土師器、28、29は中世の掠鉢と近世の直口壺である。

(今村道雄)

## 第5節 平成12年度の調査（第2次調査）

平成11年度の第1次調査で実施したB調査区の南側に接する面積211m<sup>2</sup>の用地（A区）と、さらに約20m離れた面積1103m<sup>2</sup>の用地（B区）、合計1314m<sup>2</sup>を発掘した。

第3層・第4層・第7層（地山）の上面で遺構を検出した。

A区（第16・17図）

遺構面1（第24図4期）

耕作土床土の第2層下面（TP 26.1～25.95m）で土坑・小溝・ピットを検出した。

土坑20（N15°g 7°-III・IV）

上面は、ほぼ円形を呈する。径2.55m、深さ2.3m、埋土は最上部層が黄灰色（2.5Y 6/1～5Y 7/1）微砂質粘質土、以下は不明で、下部層約1mは、灰色（N 6/0）～明緑灰色（10G Y 7/1）粘土。ベース土は底部以下まで灰白色砂礫である。調査中に壁面が崩落してしまったので、深さ・埋土のデータについては不充分である。

小溝

調査区の中央部東寄りで幅20～30m、深さcmの小溝を10条検出した。長さ3m以下のもので、N45°W、W45°Sの2方向を探り、ほぼ直交する。鋤溝である。

遺構面2（第24図3期）

第3・4・8層上面（26.1～25.8m）で土坑・小溝・ピットを検出した。調査区の東から北側にかけて存在する。

土坑

ピットとするものよりやや大きく深いもの。平面楕円形を呈するもので、30（37×44cm、深さ7cm）、36（56×61、12）、38（60×85、8）、44（82×110、11）、49（45×60、7）がある。

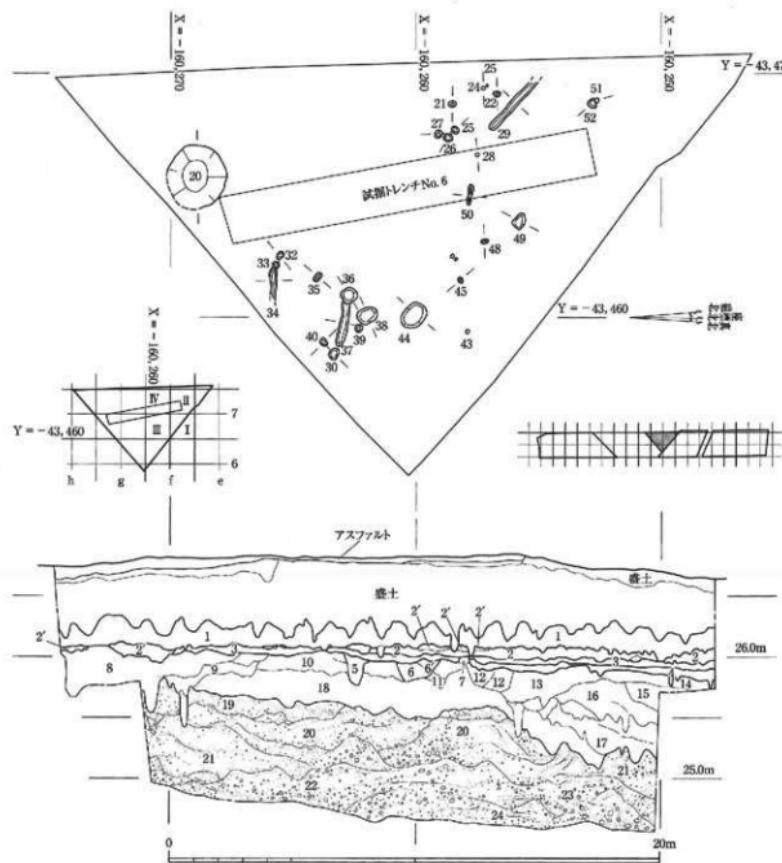
小溝

幅20～30cm、深さ3～7cmで、4条検出した。方向は小溝29のみN43°Wを探り、他はW9°N～N7.3°Nではほぼ同一方向を探る。第1面と同様に鋤溝と考えられる。

ピット

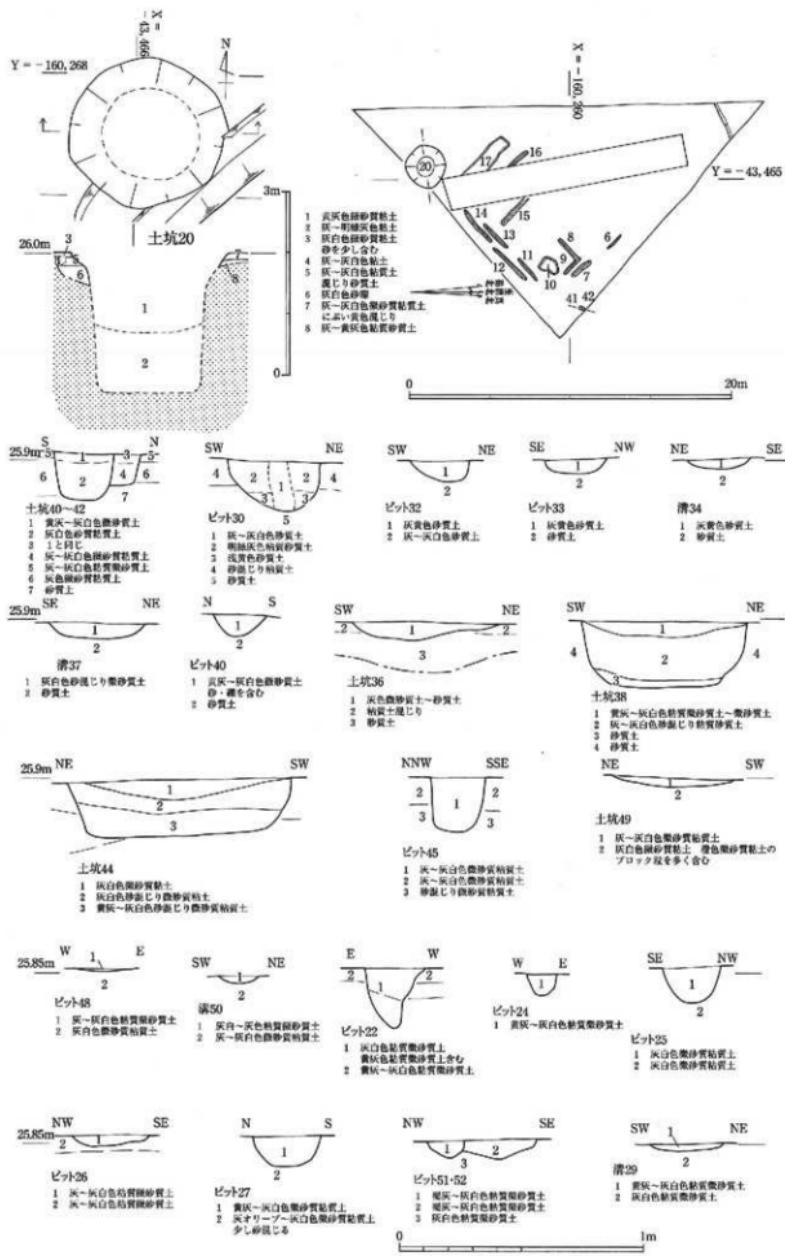
径20cm前後の大きさで深さ5cmに満たない浅いもの。ある程度のまとまりをもって存在するが、具体的な性格は不明である。

1面・2面、ともに土坑・小溝・ピットから耕作地の状況を示すものと考えられる。



- |                        |                                   |
|------------------------|-----------------------------------|
| 1 旧耕土 深灰色粘質微砂質土        | 12 灰白色粘質微砂質土                      |
| 2 黄灰~灰褐色微砂質土           | 13 黄灰~灰白色粘質微砂質土                   |
| 2' 灰~灰白色微砂質土           | 14 灰白色粘質微砂質土                      |
| 3 棕色粘質土                | 15 灰白色粘質微砂質土                      |
| 4 灰~灰黄色微砂質土            | 16 灰白~浅灰~淡黄色微砂質土上~微砂質土            |
| 5 灰白色微砂質粘土 淡黄色をおびる     | 17 灰白色粘質土                         |
| 6 灰色粘質じり微砂質粘土          | 18 灰白色砂質泥じり微砂質土                   |
| 6' 微砂質粘土~微砂質粘土 淡黄色をおびる | 19 灰白色粘質土~微砂質粘土                   |
| 7 灰白色砂~土               | 20 灰白色砂質土 3~4mm大以下主体に2~4cm大難混じる   |
| 8 灰白色微砂質粘土             | 21 灰白色砂質土 2~3mm大以下主体に5~6cm大以下の難合む |
| 9 灰白色微砂質粘土             | 22 灰白色砂質土 5~7cm大の重角礫を多く含む         |
| 10 灰白色粘質じり微砂質粘土        | 23 灰白~灰砂質 明褐色を全体におびる              |
| 11 灰白色微砂質粘土            | 24 灰白色砂 明褐色を全体におびる                |

第16図 遺構全体図 2次A区 (1/200)



第17図 遺構図 (1/300)・断面図 (1/20・1/80)

## B区（第18~21図）

遺構は耕作土床土の第3b・4層下面、第8層地山面で検出された。検出された遺構としては大溝・溝・小溝・土坑・ピットなどがある。遺構はほぼ全域に広がるが、部分的に遺構分布に粗密がある。また、第2層下面で検出された若干のもの以外は、ほとんど地山面で検出されたものである。全体に遺物の出土が少なく、とくに遺構に共伴するものが少なく、遺構の年代決定が難しい。おおよそ平安時代から鎌倉時代の遺構群、中世から近世の遺構群、近世から近代にかけての遺構に分かれる。

### 1. 平安時代末以前？（第24図1期）（第8層上面）

調査区の北部東寄りで検出された土坑・ピット群である。埋土が灰白色微砂質土を主体とする特徴とする。南部東寄りでも同質の埋土をもつ土が1基検出されている。土坑は平面の形状が17の不定形を探るもの以外は隅円方形ないし梢円を探るもののがほとんどである。

#### 土坑（17・25・27・35・95・120）

17 (80×278cm、深さ29cm)、25 (16×40、5)、27 (42×80、18)、35 (59×81、27)、95 (90×60)、120 (120×70、43)

#### ピット（28・97）

28 (23×27、14)、97 (50×35)

### 2. 平安時代末頃（第24図2-1～2-3期）

調査区中央部を南東から北西にかけて走る溝群を中心とする遺構群である。主に3条の溝が重複して走る。これらの溝の切り合い関係から3期に小期区分する。

2-1期 調査区中央部北寄りで検出された溝7をはじめ、これと重複する土坑・落ち込みがある。後者については、前代に属する可能性もあるが、埋土が異なっていることや北側の落ち込みは層位的に新しいことから区別した。

#### 溝7（N15-b 6～c 6）

幅1.3～2.4m、深さ15cm、埋土は、上部層褐灰色粘質微砂質土、最下層灰色～灰白色砂礫土。南東から北西へ流れる。

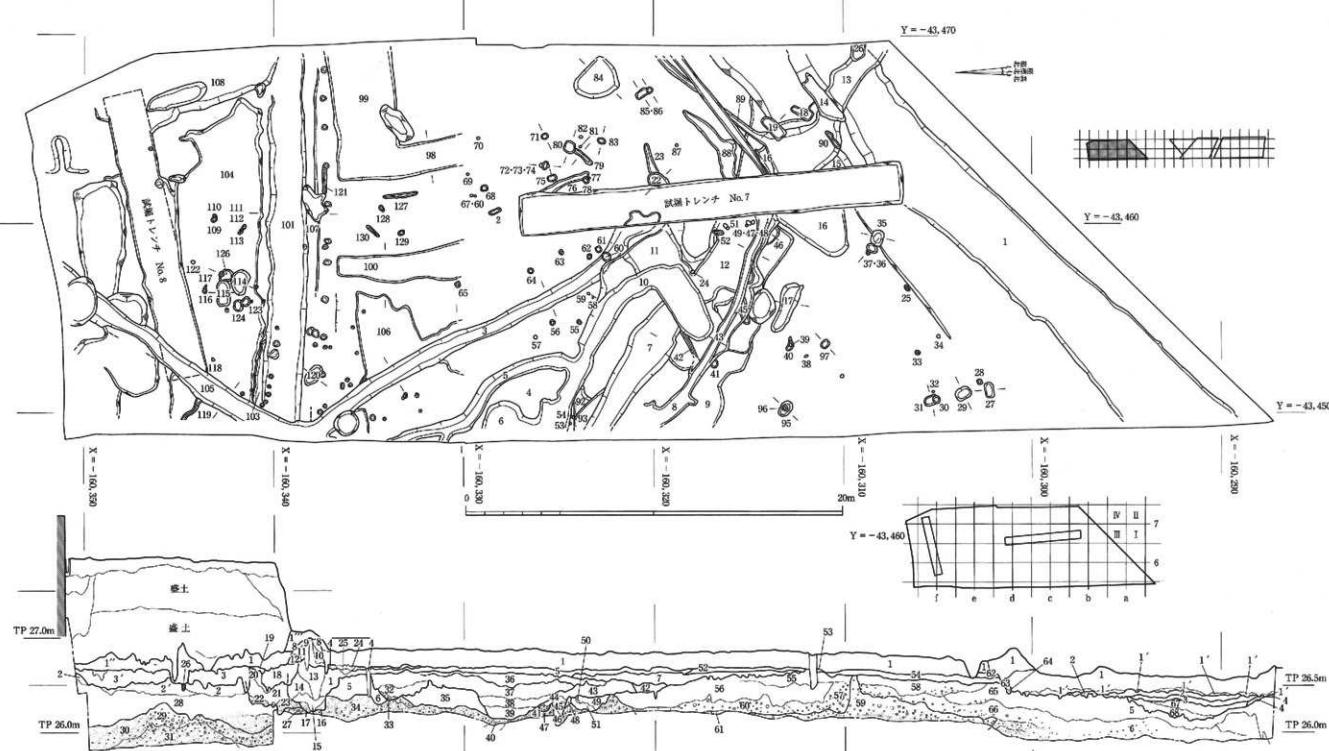
#### 土坑11（N15-c 5・6）

4m×2m程度の不整形を呈する。灰白色微砂質粘質土、灰白色粘質砂質土で埋まる。溝3など切られていいるため上部の輪郭ははっきりしない。

2-2期 先の溝7を挟んで、北に溝8、南に溝3が同じ方向で走る。北西寄りのb7-I区で合流し、さらに北西に流れると考えられるが、明確には検出できなかった。また、調査区南部で、北東から南西にむけて走る溝105がある。

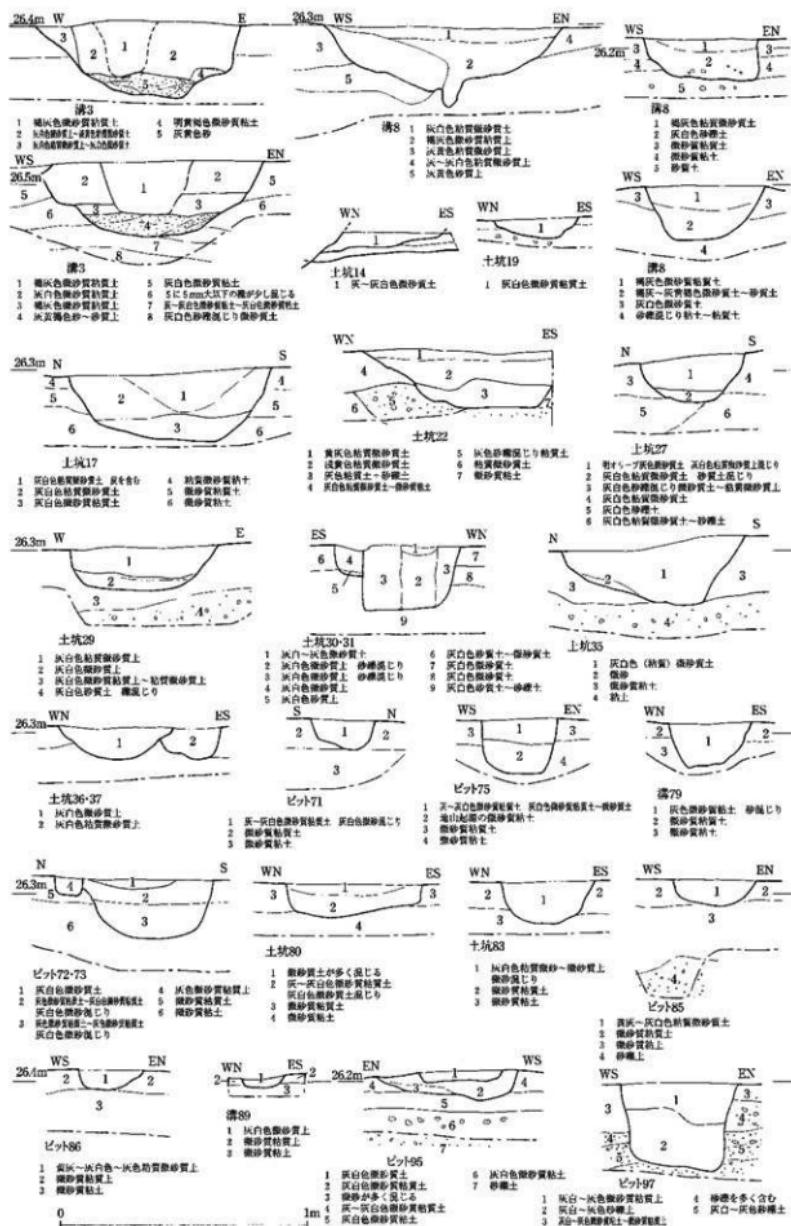
#### 溝8（N15-b 6～b 7）

幅約1m、深さ30cm、埋土は黄灰色～灰黄色粘質微砂質土。最下層に灰色色砂礫質粘質土が堆積する。溝3と同様、断面の観察から掘り直していることがわかった。

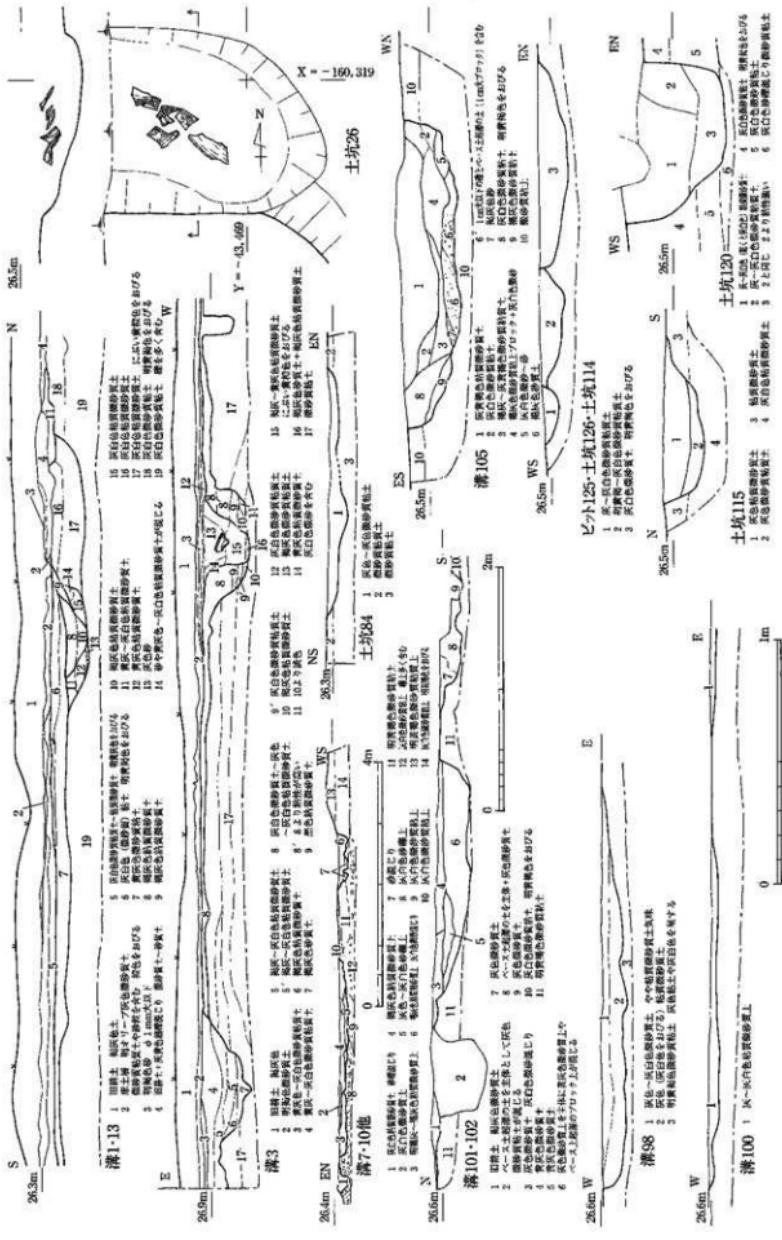


第18図 遺構全体図 2次B区 ( $H = 1/200 \cdot V = 1/40$ )

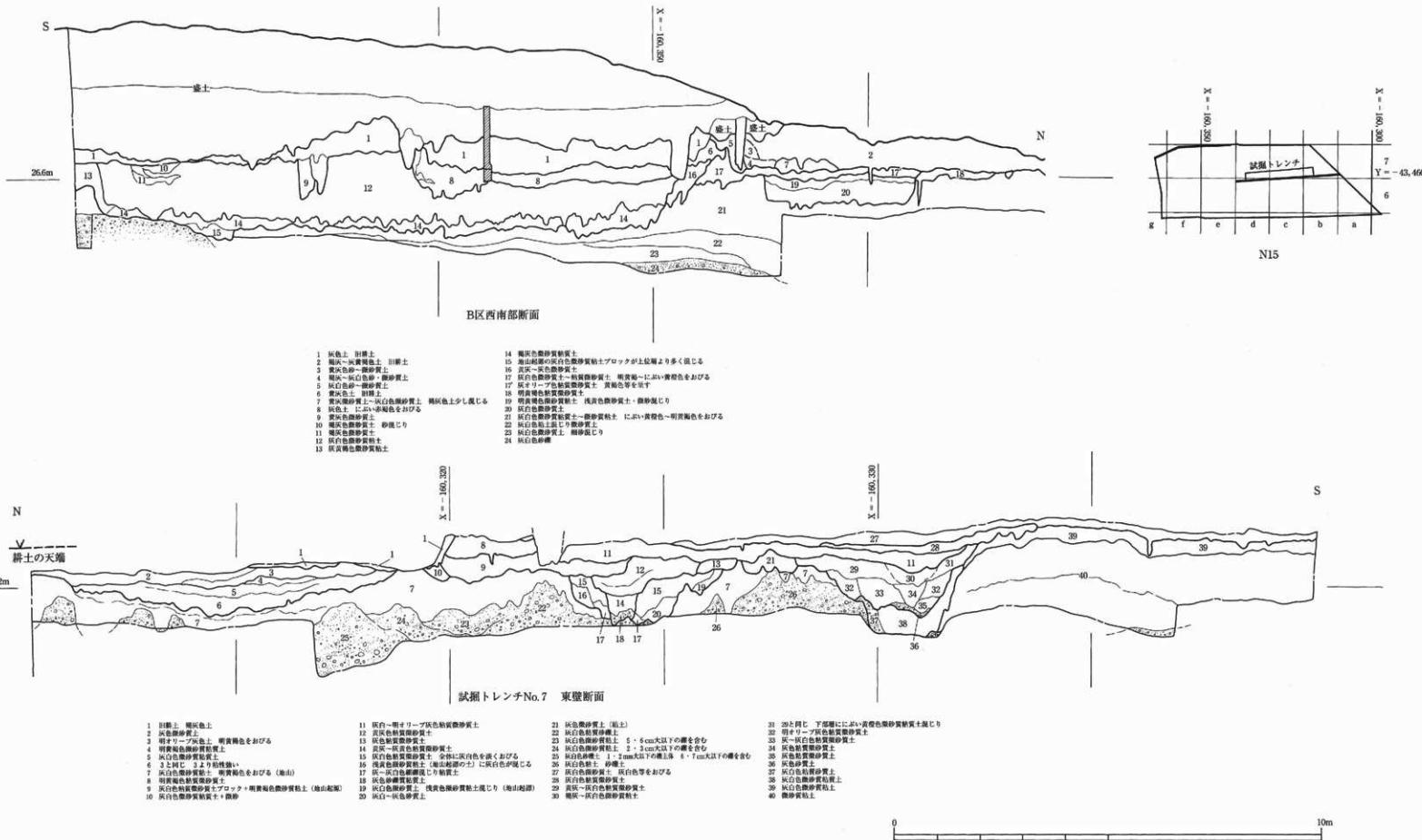
卷之三



第19図 遺構断面図1 (1/20)



第20図 遺物出土状況図（1/20）・遺構断面図2（1/40・1/20）



### 溝3（N15-d 5～b 7）

幅約1m、深さ30cm。灰白色微砂質土粘質微砂質土で埋まった後、再び掘りなおしている。溝底に褐灰色砂質土～粘質微砂質土が堆積した後、褐灰色粘質微砂質土で完全に埋まる。d 5～IV区で溝105と重複する。溝105が古く、溝3が新しい。重複する位置がちょうど調査区の東壁面に接する地点にあたり、わかりにくかったが、壁面での土層の観察から切り合ひと溝の走向が推定できた。ともに東に方向を転換させるようである。

### 溝105（N15-d 5～f 6）

幅1.5m、深さ25cm、溝底に1cm以下の砂礫と基盤土起源の土が混じった砂質土が堆積した後、灰黄褐色粘質微砂質土、褐灰色微砂質粘質土などで埋まる。溝の底面高が南西に傾斜することから、この方向に流下していたものと考えられる。e 6-IIで小溝（幅20cm、深さ7cm、明オリーブ灰色微砂質粘土～粘質土と灰色砂質土混じり）が取りつく。

2-3期 先の溝群が埋没した後、浅い谷状の地形とともに溝5・10が南東から北西方向に走る。しかし、前代までのように北西部まで走らず、中央部で北東に向きを変え、すぐに止まってしまう。溝5は南端縁が高く、この縁の下に沿って走る。この南端縁は段を形成していて、溝10と合流した後も北西へ向きを変え、さらに西へ走り、調査区外へ延びる。対岸にある落ち込みの肩と合わせ、小さな浅い谷をつくる。

### 溝5（N15-d 5～c 6）

幅70から80m、深さ35cmで、東壁から蛇行しながら北西方向に延び、溝10とc 6-Iで合流する。溝底付近に褐灰色砂が堆積し、灰黄褐色微砂質粘質土で埋まる。

### 溝10（N15-c 6～b 6）

幅1～1.4m、深さ約20cm、b 6-IVで直角に曲がり、幅も2m近くなるが4m程で、止まってしまう。d 5-IIで小溝が1条東へ延びる。埋土は褐灰色粘質微砂質土で砂が混じる。

また東壁付近では、南端縁が屈曲を描くが、土坑あるいは落ち込みが重複するかもしれないが平面的には捉えられなかった。c 5-IV区で瓦器碗が1点（第22図46）出土した。

溝をふくむ浅谷の北側と南側には、土坑・ピット・小溝が分布する。今回検出されたピット・小溝のほとんどを占める遺構であるが、これらもまた遺物に乏しく時期の同定が困難であった。しかし、各遺構の埋土が灰色系微砂質土あるいは微砂質粘質土が主体となっており、この点から同時期性を有するとみた。さらに溝群との関係についても本調査区の主要時期である2期から3期に対比させて考えるのが妥当と考えられるが、2-1・2期の溝群埋没後に掘削された土坑・ピットなどもこれら遺構群の広がりの中で捉えられるとみて、当該小期のなかで扱う。遺構の密度は北側が疎らで、南の方が密度が高い。いくつかの遺構がやや近接しつつ、互いに散在している（面積比約10%）。調査区北西隅にある土坑14・19からは土器が少量出土している。須恵器・瓦器片で、遺構の時期を推定することができる数少ない遺構である。

#### 土坑14（N15-b 7-II）

3.2×1m以上を測る。埋土は灰色微砂質土。後代の溝1に切られているため、全容は不明である。現状での深さ16cm以上を測る。埋土中より瓦器楕底部片（第22図58）が出土。

#### 土坑18（N15-b 7-II）

1.17m×49cmを測り、隅円方形を呈する。深さ7cm。埋土は灰白色微砂質土。

#### 土坑19（N15-b 7-I・II）

1.5m×60cmを測り、隅円方形を呈する。深さ18cm。埋土は灰白色微砂質粘土。中から須恵器杯（37）が出土。

#### 土坑84（N15-c 7-II）

1.9×2.3m、平面不整形の土坑

### 3. 中世～近世（第24図3～4期）

調査区の北端に沿って大溝が走る。この時期に現地条に現れる造成が行われた。大溝の南側で溝に平行に段造成が行われたと考えられる。調査区南部で溝・畦畔が検出された。しかし南部で検出した畦畔は条里型地割の東西坪境線に乗っており、次代の大溝とともに地割の存在することが証される。畦畔とし字形に曲がる溝とは若干方位軸がずれており、造成時期が相違することも考えられる。

#### 大溝1（N15-j 5～b 7）

幅3.7～4.3m、深さ20cm、埋土は灰白色微砂質粘土。断面は緩い皿状を呈する。N46°Eの方向を探る。

#### 溝98・99（N15-d 7）

溝98は幅1.2m、深さ10cm、溝99は幅3.5m、深さ15cmを測る。埋土は灰白色微砂質土。

#### 溝100（N15-d 6）

幅 1.1～1.9m、深さ 4 cm、埋土は灰色粘質微砂質土。

#### 畦畔107（N15-d 6・7）

幅50cm以上、長さ約19m以上で、東西ともに延びると考えられる。東西大溝101に切られているので本来の幅は不明。現状での高さ8cmを測る。地山削り出しによる造成。

### 4. 近世～近・現代（第24図5期）

調査区北部の段周辺に浅い掘りこみがみられる。南部では、東西大溝・大型の掘りこみ・井戸が在する。

#### 東西大溝101（N15-d 6・7）

幅約2.2m、深さ約30cm、埋土は灰色～黄灰色微砂質土に地山起源のブロック土が混じる。埋土からは近世～近代陶磁器・瓦が出土した。溝の北側に沿って径30cm程度のピットが並ぶ。横列とみられる。

### 大型掘り込み108 (N15-e f · 7)

調査区南西隅に大きく広がる。埋土は大半が黄灰色土～灰白色土地山起源のブロック土が混じる。底面近くで地山起源のブロック土を含む灰色微砂質土が堆積し、瓦片が少量出土した。埋土の状況からして水性堆積ではなく、人為的に埋めたとみられる。大型であることから採土坑の可能性が高い。

### 井戸 (N15-d 5 - IV、 e 6 - IV · f 6 - II)

2箇所あるが、東西大溝に接する方は、矢絣文の瓦による井戸枠をもつ。地元の年配の人によれば、井戸の記憶があるとのことで、近年まで機能していたものと思われる。

### 出土遺物 (第22・23図)

A・B両地区からは、須恵器・土師器・瓦器・瓦・陶磁器が出土し、合わせて資料箱9箱分で、全体に少ない。また、遺構内から出土したものは少なく、大半が旧耕土・床土層からのものである。そのため全体に摩滅を受けたものが多く、小片になったものばかりである。できるだけ多く図化するように試みた。

#### 須恵器 (30~44)

杯蓋 (30・31・33)、杯身 (34~38)、壺 (39~41) 瓶子 (43)、鉢 (42)、すり鉢 (32)、壺 (44)

#### 須恵質土器 壺 (45)

#### 土師器 (63~67)

杯 (63~65) 小皿 (66)、壺 (67)

#### 黒色土器 (53・54)

#### 椀 (53・54)

#### 瓦器 (46~52、55~62)

椀 (46~52・55~59)、小皿 (61・62)

#### 陶磁器

#### 天目碗 (68)

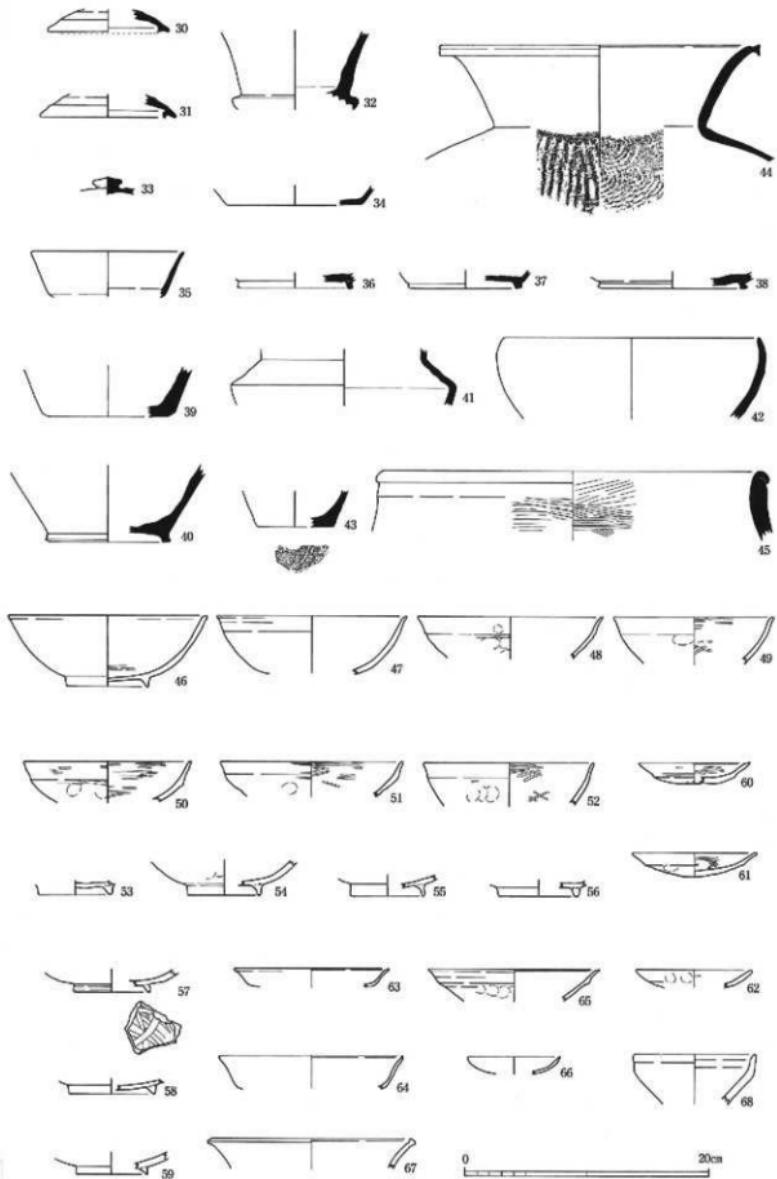
瀬戸産。

他に伊万里焼などの磁器類が出土している。

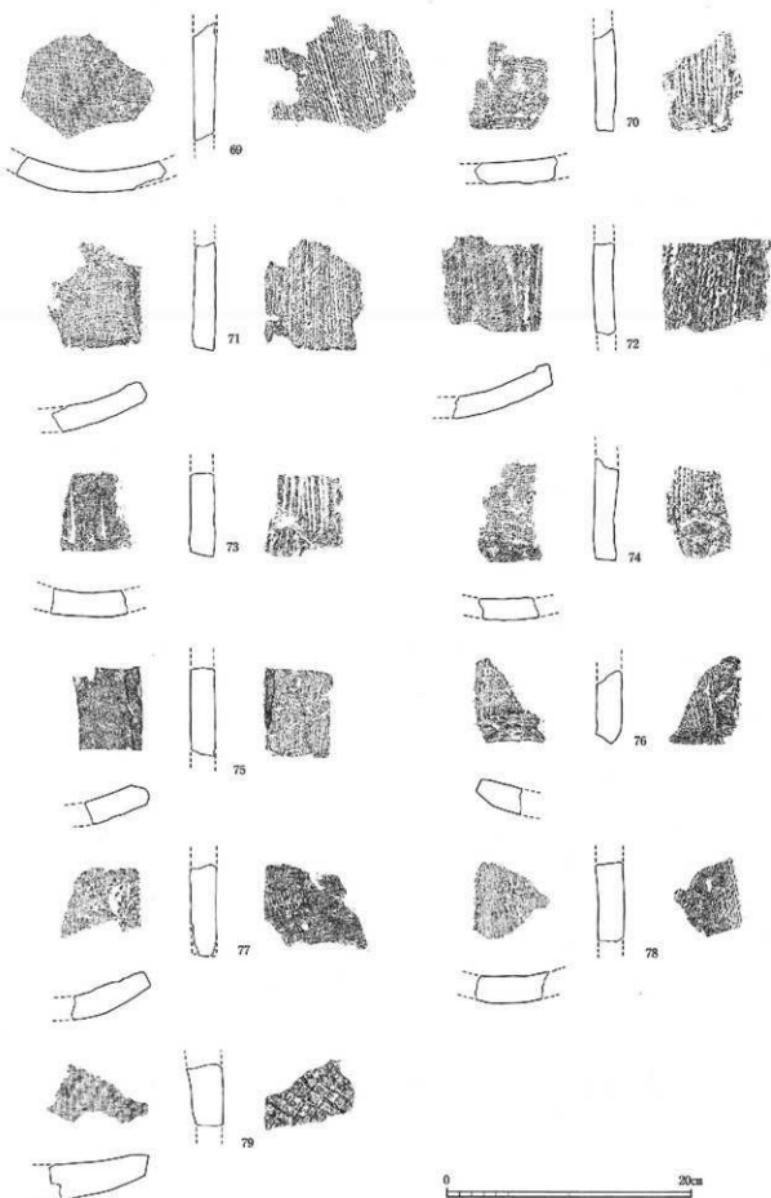
#### 瓦 (69~79)

古代瓦は少量出土している。いずれも平瓦のみで、完形品はない。

凸面に縄目叩きの成形痕をもつもの (69~75、77~78) と格子目叩きをもつもの (79) がある。一点 (76) は凸面をハラケズリで仕上げる。全面に及ぶかどうかは、小片のため不明である。ともに凹面は布目を残す。胎土はすべて須恵質であるが、やや軟質の焼成である。砂粒をやや多く含む。75のみ細粒が少し混じる程度である。凸面縄目叩きのもののうち、77・78を除いて凸面に離れ砂がみられる。



第22図 遺物実測図 2



第23図 遺物実測図 3

その他、近世から近代以降の井戸などから出土した瓦がある。これらにはコビキ痕（A）が残るものがある。

### 第3章　まとめ（第24図）

先の章までに、試掘調査に始まり、1次・2次と本調査を重ねて得てきた成果を個別に報告した。これらの成果を時期別に整理し、遺跡の性格の一端にふれてみたいと思う。

#### 1. 飛鳥時代

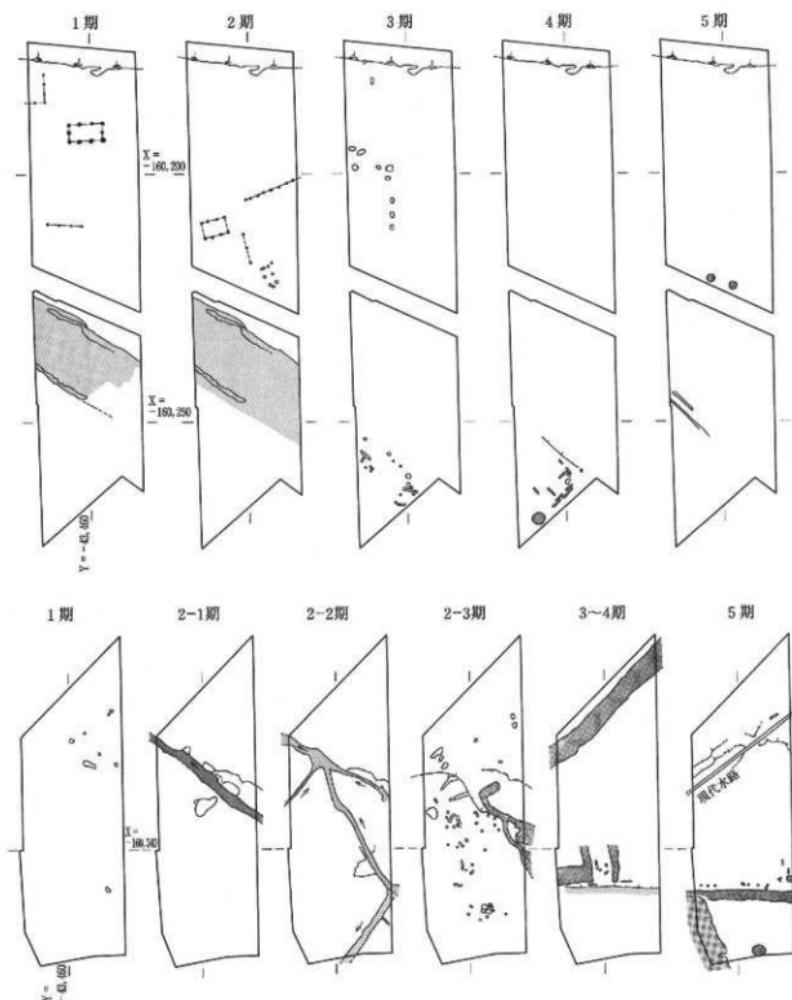
遺構として検出されたものはなかったが、当該時期の須恵器が少量であるが1・2次調査区とも出土している。磨滅などを受けておらず、遠く離れた地点からの遺物とは言いつかなく、近接地に当該期の遺構が存在した可能性が高い。

#### 2. 奈良時代後半（変遷図1期）

1次A区・B区を中心に検出されている。1次A区北部中央で、3×2間の掘立柱建物1棟が検出されている。ほぼ東西方向を探る建物。この建物と同方向の軸をもつ構列2箇所についても一体になるものと考えられる。B区では、南東から北西方向に走る幅12mの落ち込みが走る。先の建物・構列とは軸方向が大きく違う。層序的には2期と考えられるが、埋土下層中の土器から奈良時代とみてよいと考えられる。自然地形に浅谷に沿って開掘されたと見られる。この落ち込みから南では建物はないので、居住区を限る性格をもつ。一方、北端は現状では段により北に低く限られていて、試掘時でも明確な遺構は検出されなかった。しかし、工事での掘削断面では包含層とみられるものが部分的に確認されたことからも北に延びることは間違いないと考えられる。同様に東・西の両方向についてもこの建物を含めた集落の広がりを想定してよい。時期の決め手は、多くが隅円方形の柱掘り方をもつこと、包含層中の遺物に当該時期の含む点からである。

#### 3. 奈良時代後半（変遷図2期）

1次A区南部西寄りで検出した3×1間の掘立柱建物1棟とピット群・構列の一群を前代の遺構群より區別し、後出するものとした。中心となる掘立柱建物は先の建物より軸方向をやや南西から北東に振る。この建物とほぼ同方向に軸をもつ構列2条とピット群を一群と見なした。これには、建物相互に違いを見出したからである。ともに桁行き3間の建物であるが、若干規模に差がある。桁行きで、先の建物が約6.9m、後の建物が約4.9m、梁行きは、先が約3.45m、後が約3.2mと長さには大差がないが、間数が2間から1間なっており、全体に小規模化している。柱穴掘り方の形状が先の建物では一部で崩れはあるものの、隅円方形を基本としている。しかし、後の建物では一部で方形掘り方の名残を留めているとみられるものが1、2個あるものの、ほとんどが不整形な円形に変わっている。柱穴掘り方からは遺物の出土や重複関係のない現状からこの点に注目し、この変化を時間的な変化とみた。この一群も南限はやはり南東から北西に走る落ち込みのラインであろう。他方向についても同様の広がりをすると考えられる。では、時期的に

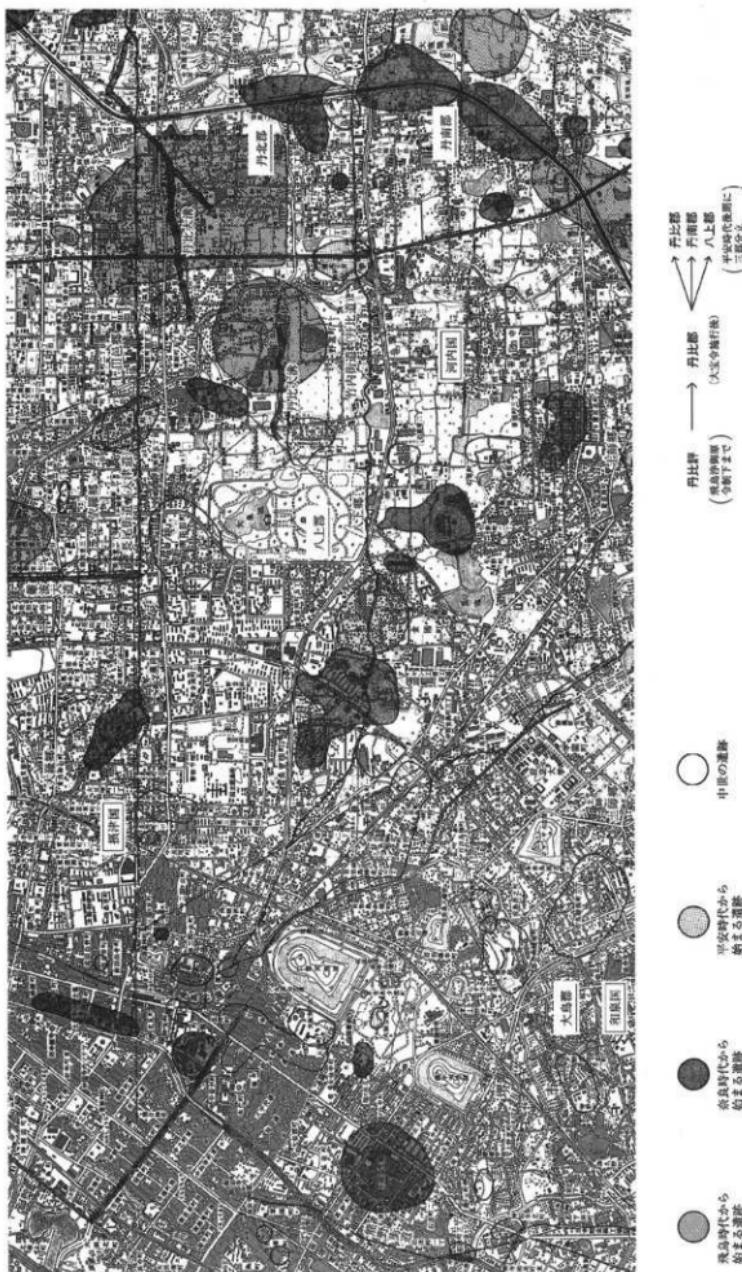


第24図 全体造構変遷図（1/1,000）

施行が想定される条里地割との関係はどうであろうか。今回の調査区のうち2次B区で現況地条で復元される坪境線に当たっている。調査では当該期の関連造構は検出されなかった。しかし、あえて現況地条線に施行されていたことを前提にすると、先の建物等の一群は大体ほぼ方位を揃えているともいえるが、後の建物等の一群はズレを生じてきている。前提になる地割の施行の有無も含めて、発掘調査による実証が要求される。落ち込みより以南の状況については不明である。

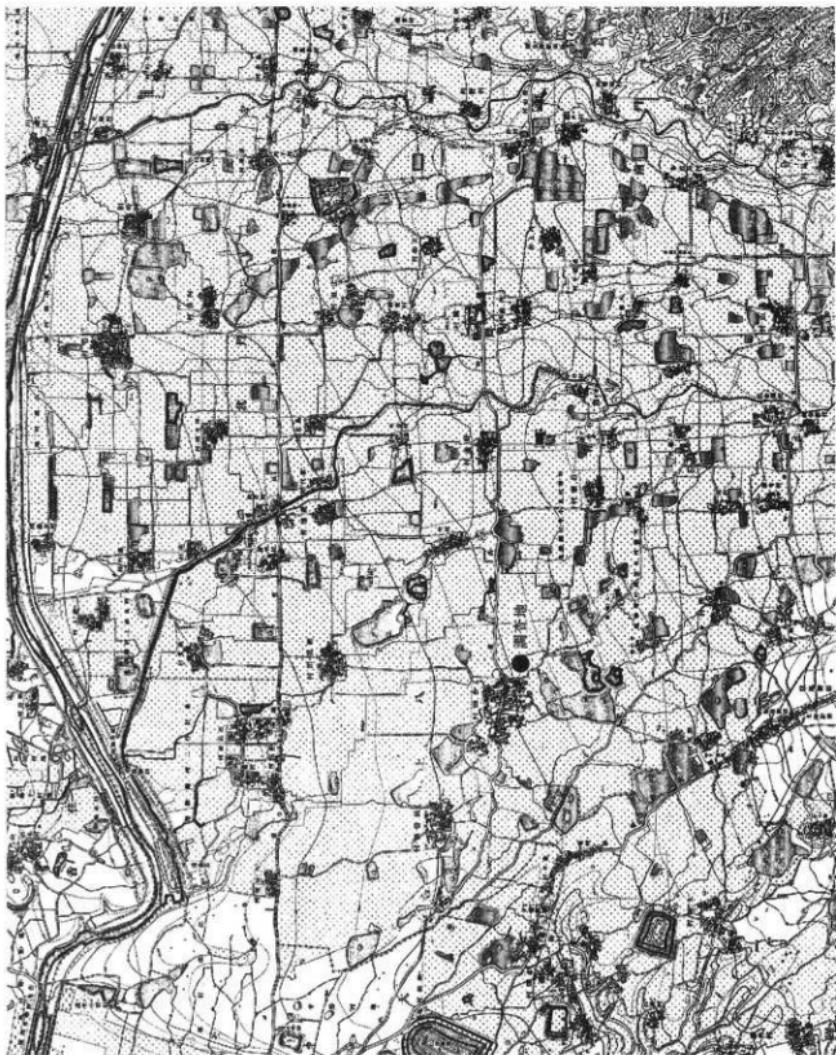


第25図 金岡西遺跡・金岡遺跡周辺図（1/4,000）



第25図 古代・中世の金岡西遺跡周辺 (1/40,000)

第27図 明治時代の金剛西遺跡周辺



他に同規模同形態のビット群があり建物の一部であった可能性がある。A区中央東寄りを中心（一部南端部で）検出された。部分的にビットが並び、建物として群在する可能性がある。先の建物との時期的な関係はわからない。

#### 4. 中世～近世（変遷図3～4期）

1次A区で土坑群（長方形・楕円形）、1次B区では、溝状落ち込みが名残をとどめる。A区

で検出された土坑群については、類似した事例から土壙墓の可能性があるが、現状では可能性を指摘するに留まる。2次A区では、土坑・ピット群、B区では溝群・ピット群・土坑群・道状遺構・畦畔が検出された。畦畔は後世の東西大溝に切られているが、条里地割の坪境に沿って走る。耕地の様相を示す。

##### 5. 近世～近代（変遷図5期）

1次A区では井戸2基（近代から現代）が検出され、2次A区では小溝列（畝溝あるいは鋤溝）が検出された。前代につづいて耕地としてつづき、現代に及ぶ。2次B区では条里地割の坪境に東西大溝が1条検出された。出土した陶磁器から近世から近・現代まで水路として使用されたとみられる。

つぎに今回の調査地に近接する金岡遺跡の様相を参考にしながら検討しておこう。南約400mに位置しており、標高30.9mにある。ここでは奈良時代末から平安時代の8棟の掘立柱建物が検出されている。ひとつの調査区では、2×3間の建物と倉庫1棟と井戸が区画溝に囲まれた状況が抽出されている。他の調査区でも建物・井戸と区画溝がセットで捉えられている。また、建物の主軸方向をもとに2群に分けられている。N12°30' E、N12°20' E（国上座標に直すとN6°6' E、N5°56' E）を探る5棟の建物とN8° E（N1°36' E）を探る3棟の建物群に分かれ、柱穴掘り方の切り合い関係から、前者の建物から後者の建物へと推移している。ここで今回の金岡西遺跡での奈良時代の建物・欄列とを比べてみよう。先に建物・欄列の軸方向や建物柱穴の形態から2つに分け、時期的な推移を想定した。すなわち、N3°強Wの東西棟とほぼ方向を揃える欄列の一群からN13°30'強Wの東西棟とほぼ同方向をもつ欄列の一群への変化とみた。もとより、掘立柱建物と欄列で構成される本地点の状況と建物・区画溝、さらに倉庫・井戸などの関連施設を持つことがわかっている金岡遺跡とは、性格的に違うと思われるが、ここでは両者の時期的な関係についてふれてみよう。建物の主軸は、方位からの振れをみると、金岡西では、3°から13°の変化をみせているが、先後の時期的な関係で解釈した。他方、金岡では約6°から1°の振れ幅をもち、金岡西とくらべると、先行建物・欄列群の振れにほぼ近いといえる。また、柱穴掘り方の形態も隅円方形を残している点など似ている点もある。このことから、時期的に近い時期と考えられ、両遺跡の居住地が近接して存在していたことになる。

金岡西では、平安時代以降については、建物が見つかっていない。居住地を移したと考えられるが、西側の現金岡集落の地、つまり金岡神社遺跡では平安時代から鎌倉時代の集落が推定されていて、移動先の候補とするのが一番順当な考えと思われる。遺跡が現集落と重複することもあって調査の機会が少なく、資料の蓄積が不充分であるが、将来の成果に期待される。今回調査した金岡西遺跡周辺の洪積台地では、近年調査例が増えてきている。古代から中世にかけての集落の展開を考えるに当たって興味深いフィールドといえる。

なお、条里地割との関連についていいうと、現況地条から読み取れる地割方向はN2° Eを探っていて、金岡西遺跡の先行居住区の軸や金岡遺跡のそれと近い値をとる。

（亀島）

# 報告書抄録

ふりがな	かなおかにしいせき							
書名	金岡西遺跡							
副書名								
卷次数								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2000-7							
編著者名	今村道雄・亀島重則・竹原伸次							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(6941)0351							
発行年月日	2001年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東経 °°'	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
かなおかにし 金岡西	さかいし 堺市 かなおかちようかない 金岡町地内	市町村	遺跡番号					
		27201	373	34° 33' 18" 34° 33' 12"	135° 31' 35"	平成12年1月～ 5月、平成12年 9月～平成13年 2月	1,561 1,314 計 2,875	都市計画 道路南花田鳳西町 線建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
金岡西遺跡	集落 水田	飛鳥時代～奈良・平安・鎌倉時代		掘立柱建物・土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・瓦器・瓦	奈良時代後半の集落 平安時代末～鎌倉時代の水路群		

- 国土地理院 1983「土地条件図」大阪東南部 (1:25000)  
 服部昌之 1999「茨原町の位置と地形環境」『美原町史』第1巻本文編  
 前田昇 1971「堺市域の地形発達」『堺市史』統編第1巻  
 三浦圭一 1971「律令国家の形成と堺」『堺市史』統編第1巻  
 大阪府教育委員会 1974「金岡遺跡発掘調査概要」  
 大阪府教育委員会 1986「南花田遺跡発掘調査概要」Ⅰ  
 大阪府教育委員会 1987「南花田遺跡発掘調査概要」Ⅱ  
 大阪府教育委員会 1988「南花田遺跡発掘調査概要」Ⅲ  
 大阪府教育委員会 1995「金岡神社遺跡発掘調査概要」  
 堺市教育委員会 1978「新金岡町所在遺跡発掘調査抄報」  
 堺市教育委員会 1983「中百舌鳥遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第14集  
 堺市教育委員会 1985「金岡神社遺跡」『堺市文化財調査報告』第22集  
 堺市教育委員会 1988「金岡神社遺跡」『堺市文化財調査報告』第38集  
 堺市教育委員会 1989「金岡公園遺跡」『堺市文化財調査報告』第48集  
 堺市教育委員会 1991「金岡遺跡」『平成2年度国庫補助事業発掘調査報告』

# 図 版

図版1 調査地遠景



北から



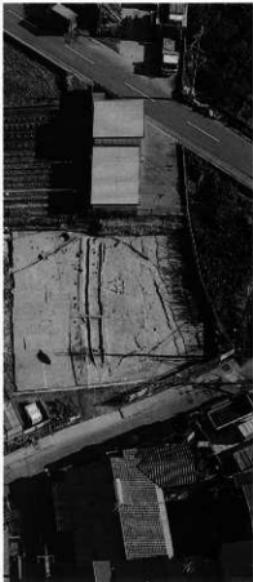
南から



1次A・B区（東から）



2次A区（西から）

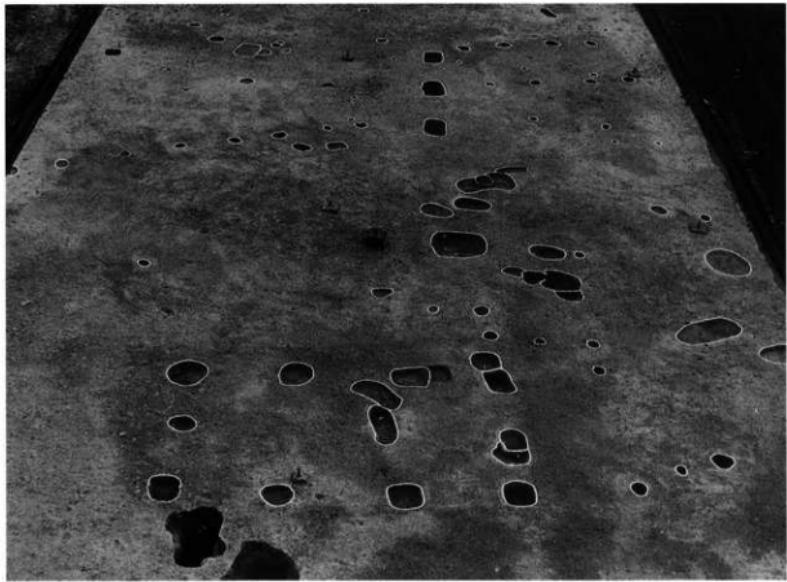


2次B区（西から）

図版 3 挖立柱建物・柵列(1次A区北部)



(東から)

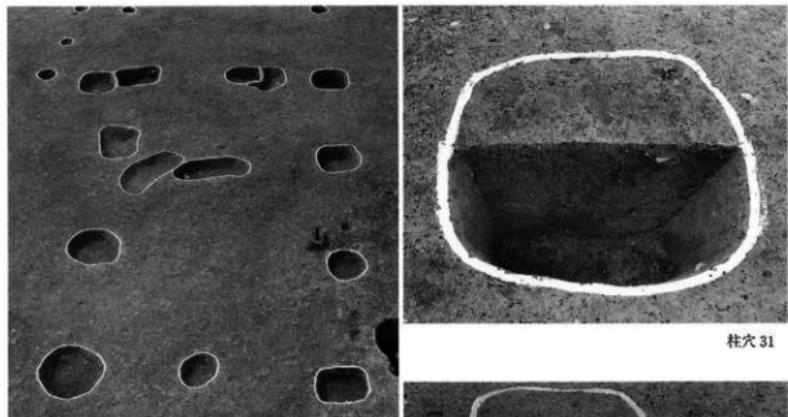


(北から)

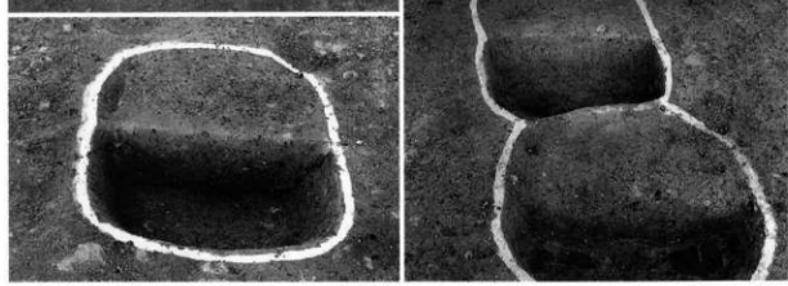
図版 4  
掘立柱建物 1 (1次 A区)



(北から)



柱穴 31

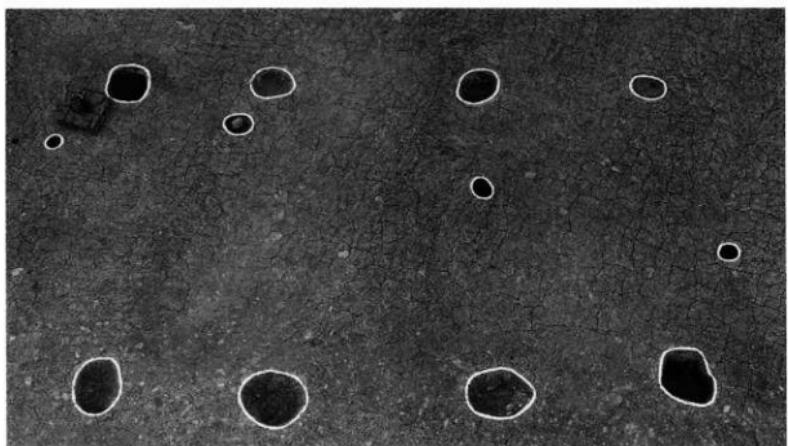


柱穴 25

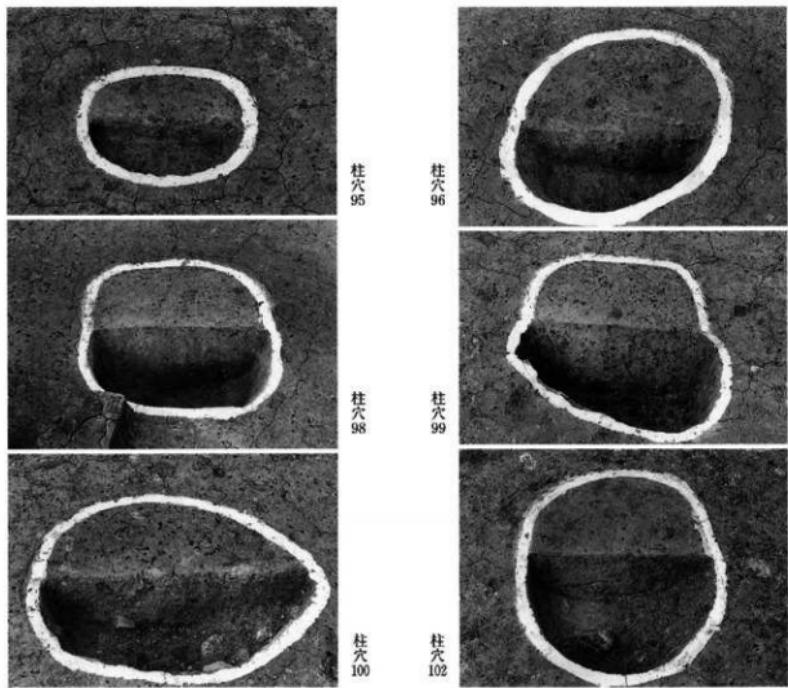
柱穴 34、35

図版 5 掘立柱建物・柵列・土坑群（1次 A 区中央部・南西部）





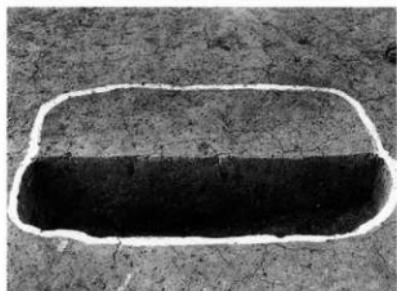
(南から)



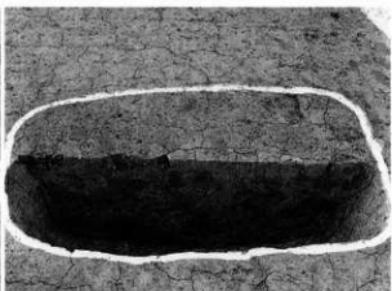
図版 7 据立柱建物・柵列・土坑群（1次 A 区南西部）



（東北から）



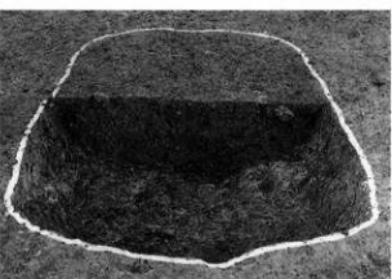
土坑 61



土坑 62



土坑 63



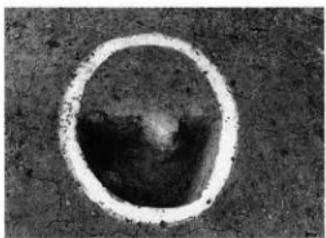
土坑 56



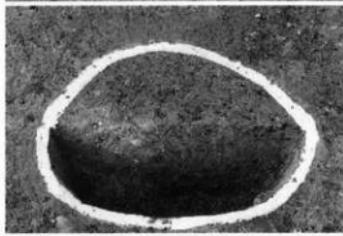
(南から)



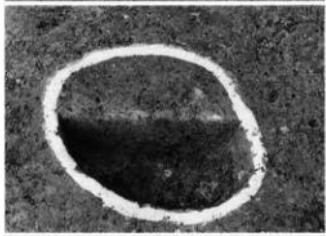
71



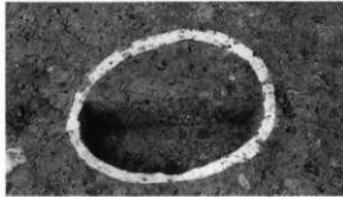
70



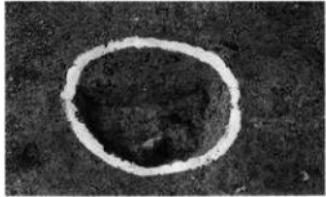
69



68



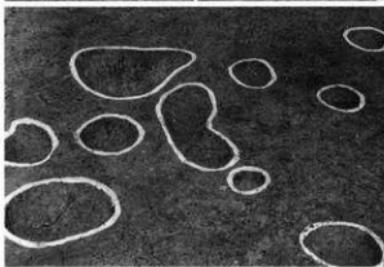
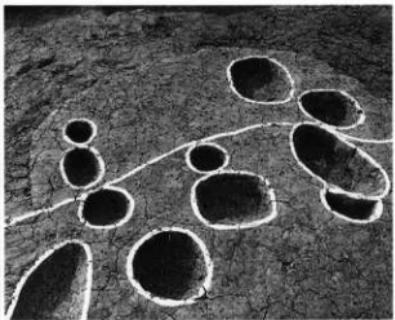
67



66



(南から)



溝・ビット（北西から）

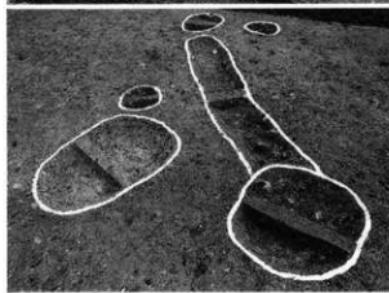
ビット239～248（南から）

ビット212～220（東から）

ビット・土坑（南から）



(東から)



土坑 20 (東から)

土坑・溝・ビット (東部、北西から)



溝・ビット (西部、南西から)

溝・ビット (東部、南西から)

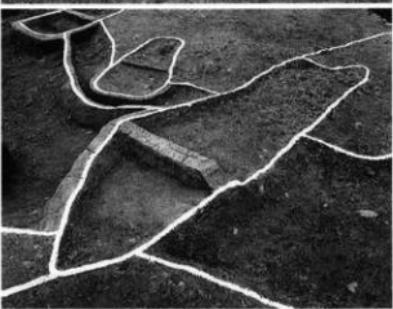


北部全景（南から）



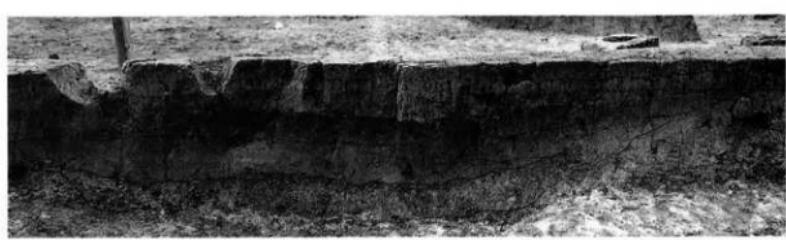
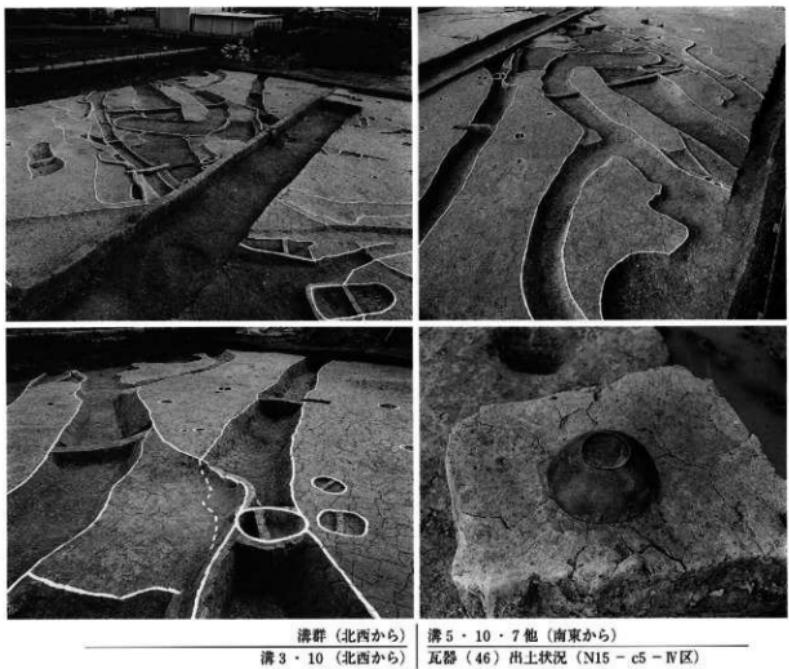
土坑・溝・ピット他（南西から）

溝 13・土坑 13 他（北から）



溝 1（北東から）

土坑 14・18・19・溝 13（北から）





溝8 (N15 - b6 - II - IV)



溝8 (N15 - b6 - IV)



溝3 (N15 - c6 - IV)



溝3 (N15 - d6 - I)



溝3 (N15 - a6 - IV)



溝5 (N15 - d5 - IV)



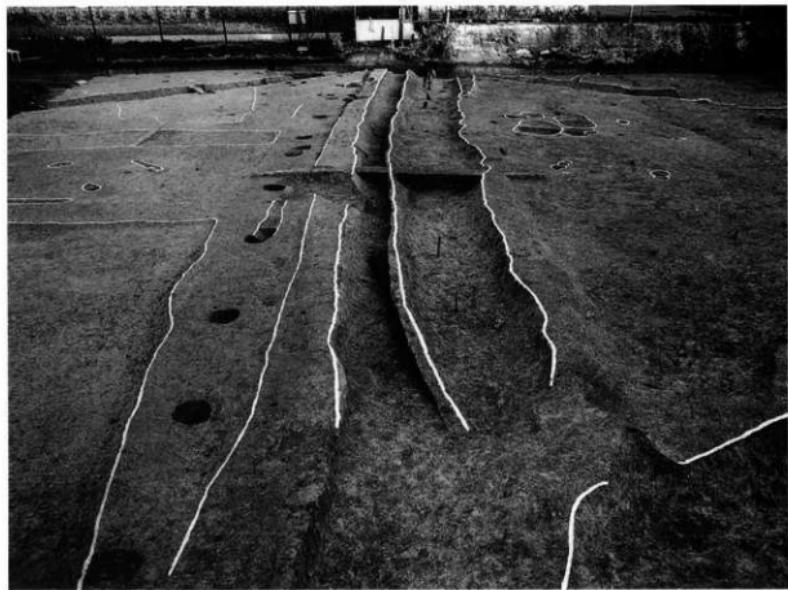
ピット97 (N15 - b6 - I)



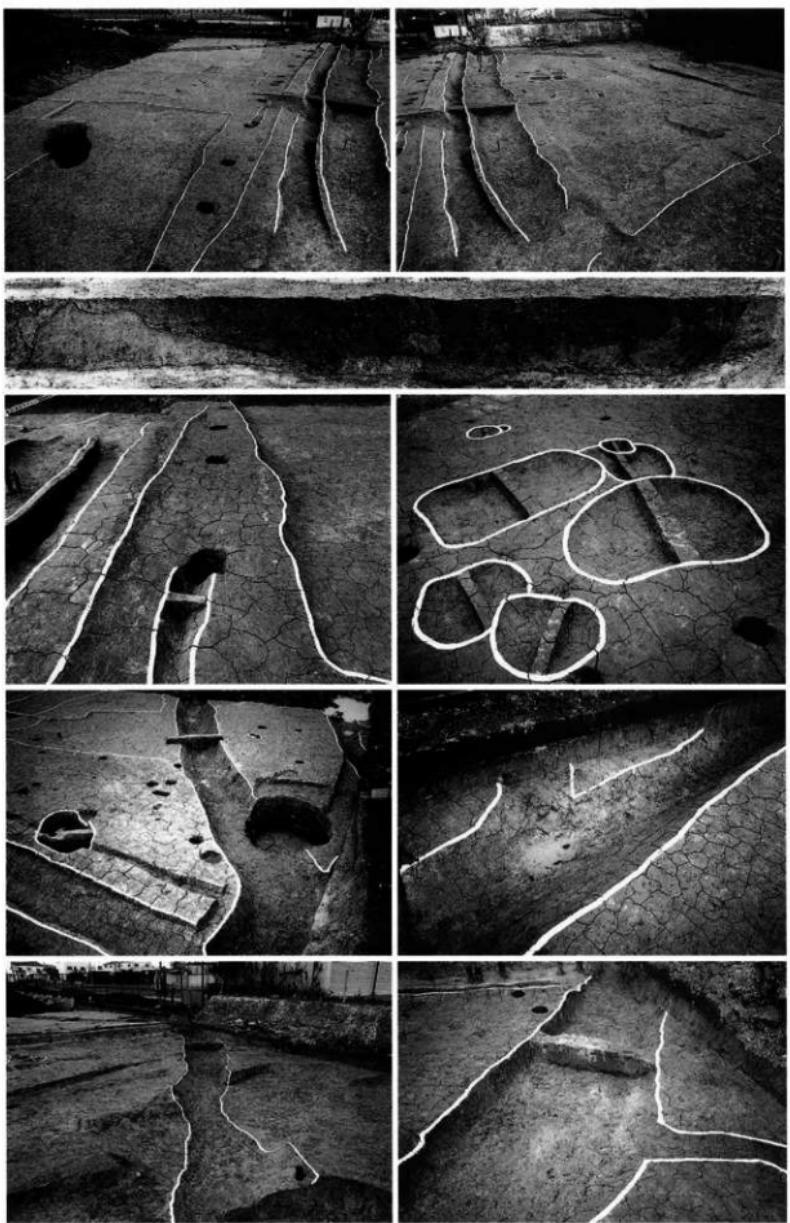
土坑29 (N15 - a6 - I)



大溝 3・105・坪境溝・土坑他（北から）



坪境溝 101・畦畔 107 他（西から）

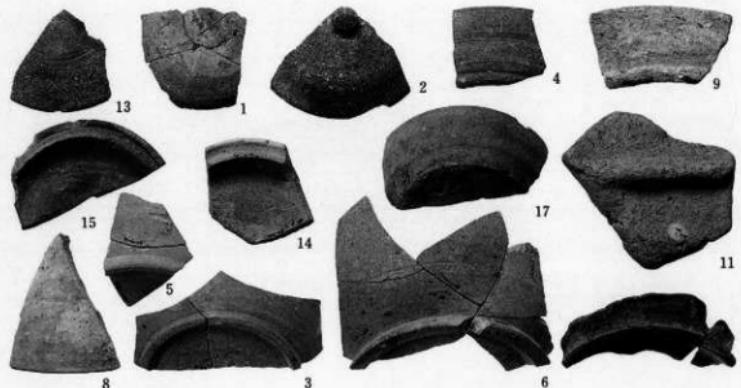
坪塙より北側 | 坪塙より南側  
坪塙溝 101 断面 (西から)

畦畔 102・小溝 121・溝 99 (東から)	土坑 114・115 他 (北東から)
溝 3・土坑 120 (南東から)	溝 5 (N15-d5-IV区) (北西から)
溝 105 (南西から)	溝 105・119 (南西から)



12

10



13

1

2

4

9

15

14

17

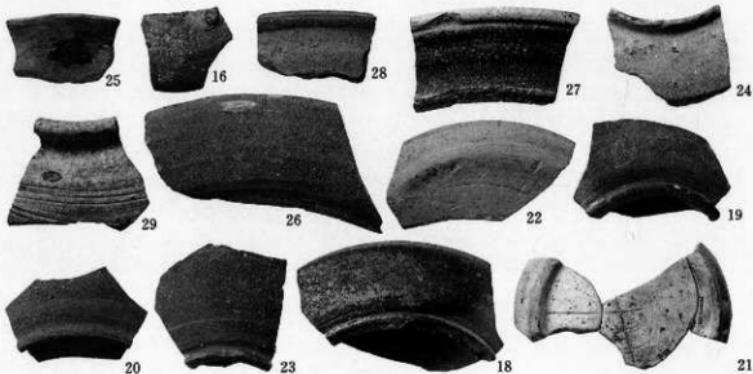
11

8

3

6

7



18

21

20

23

26

22

19

27

28

24

16

25

29

15

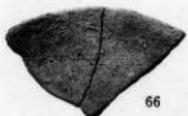
26



46



44



66



63



67



65



64



33



41



31



43



56



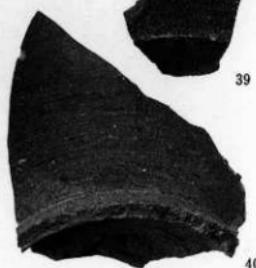
37



32

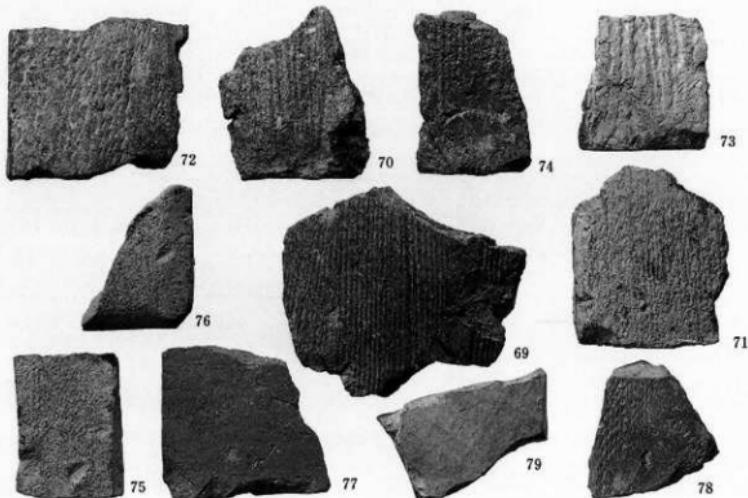
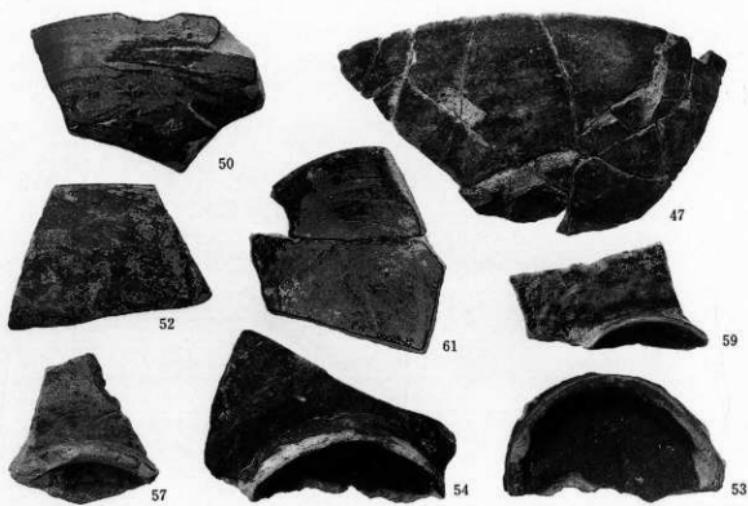


45



39

40



大阪府埋蔵文化財調査報告 2000-7

## 金岡西遺跡

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2001年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

